

日本オリエント学会だより

- 1) 第52回大会      2) 学会奨励賞      3) 作文コンクール      4) 新入会員  
5) 会員消息

1) 第52回大会

期 日：2010年（平成22年）11月6日（土）～7日（日）

会 場：国士舘大学 世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎

担 当：第52回大会実行委員会

委員長：前川和也，副委員長：岡田保良

委 員：小口和美，小口裕通，小泉龍人，深見奈緒子，辻村純代，松本 健，  
宮下佐江子，山内和也

第1日 11月6日（土）

14：00～ 公開講演会

17：20～ 奨励賞授与式

18：00～ 懇親会

第2日 11月7日（日）

9：30～ 研究発表

参加者 212名

プログラム

第1日 公開講演会 国士舘大学 世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎B棟301教室

14：00～ 国士舘大学21世紀アジア学部教授，アジア・日本研究  
センター長 沢田正昭

「オリエント古代壁画等遺跡の保存」

15：30～ 財・中近東文化センター常勤理事，アナトリア考古学  
研究所所長 大村幸弘

「青銅器時代の終焉と暗黒時代」

第2日 研究発表 5部会

国士舘大学 世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎

## 研究発表者・題目

(以下の題目は、発表時における題目変更を反映したものであり、大会で配布されたプログラムに掲載されたものとは異なる場合があります。)

### 第1会場

1. 門脇 誠二 南レヴァント地方、後期新石器時代の石器インダストリーと石刃製作——アル＝バサティン遺跡の接合資料から
2. 藤井 純夫 ヒツジ遊牧の起源——ヨルダン南部ジャフル盆地の水利遺構調査から
3. 間舎 裕生 中期青銅器時代終盤から後期青銅器時代にかけての南レヴァントにおける防御施設に関する考察
4. 土居 通正 エーゲ海青銅器時代に於けるパピルス文様の受容と展開——特に前15世紀後半の土器様式の問題に関して
5. 大津忠彦・有松唯 ホセナバード遺跡（イラン）出土暗色磨研土器の再検討
6. 足立 拓朗 古代西アジアにおける鉄器時代物質文化の変容
7. 西山 伸一 北西シリア鉄器時代の地方神殿——テル・マストゥーマの事例の再検討
8. 渡辺千香子 アッシリア美術における物語絵画の構図と様式に関する考察——アッシュルバニパルの王宮浮彫に使われた構図について
9. 四角 隆二 有翼驚頭精霊モチーフに関する一考察
10. 江添 誠 ローマ時代のデカポリス都市——ガダラとゲラサの盛衰
11. 杉本 智俊 ユダ式柱状土偶とアスタルテ
12. 岡田 保良 オリентにおける曲面組積の工法とその地域性について

### 第2会場

1. 中野 智章 ウナス王のピラミッド玄室に刻まれた幾何学文様について
2. 河江 肖剰 ギザのケントカウエス女王墓のデータ収集と考古的解析
3. 銭廣 健人 葬送用コーンを利用した社会的地位の比較
4. 近藤 二郎 エジプト新王国第18王朝アメンヘテプ3世時代の岩窟墓について
5. 菊地 敬夫 アメンヘテプ3世王墓のアムドゥアト書について——王墓埋葬室の装飾としての視点から
6. 河合 望 アクエンアテン王の後継者をめぐって
7. 高橋 寿光 エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡のピットから出土した土器群について
8. 吉村作治・矢澤健 エジプト・ダハシュール北遺跡2009年調査報告

9. 和田浩一郎 後期青銅器時代の南レヴァントおよびヌビア地方における遺体の頭位方向——エジプトの影響を焦点に
10. 長谷川奏・恵多谷雅弘 エジプト西方デルタ地域の遺跡分布——ブハイラ県マムディーヤ市の事例

### 第3会場

1. 辻田 明子 ドゥムジアブズ神——女神から男神へ
2. 森 若葉 シュメール語動詞における方向表現の分類
3. 大久保五月 シュメール語王讃歌の変遷——王と神々の「近親関係」という視点から
4. 堀岡 晴美 ファラにおける居留地建設とマルトゥ
5. 田中 裕介 シュメール初期王朝時代末ラガシュの組織と人々
6. 小坂橋又久 ギルガメシュ叙事詩に見られるアルー楽器の音
7. 山田 雅道 エマルにおけるズクル祭——ダガンとニヌルタの役割りについて
8. 川崎 康司 サムス・イルナによるキシユ市の再建
9. 櫻井絵美夏 ジムリ・リムの対シンジャール政策——クルダ王ブヌ・エシュタルとの関係を中心に
10. 依田 泉 『ギルガメシュ叙情詩』における神々の役割とその変化
11. 山田 重郎 テル・タバン出土養子縁組文書
12. 杉江 拓磨 前7世紀のアッシリアにおける『マルドゥク予言』の受容

### 第4会場

1. 澤井 真 ジュナイドにおける「原初の契約」とその意味
2. 宋 暎恩 ジャーミーの『閃光の輝き (Ashi“at al-Lama‘āt)』における下降と上昇の関係
3. 中西 悠喜 『プラトンの知的諸形象』に見る形象論の諸相——フェナーリーによる絶対存在の存在証明との関連をめぐって
4. 矢口 直英 医学の注釈文献
5. 松本 隆志 通史史料におけるハッジャージュの人物像について——『歴史』と『征服』における分析から
6. 橋爪 烈 『王冠の書』に見るアドウド・アッダウラの王統観
7. 亀谷 学 8世紀中葉バスラにおける海寇とインド西北部情勢
8. 栗山 保之 アラブのインド洋航海における島の役割
9. 片倉 鎮郎 「商人王」サイイド・サイード——19世紀初葉のブー・サイード朝政権

10. 四日市康博 イル＝ハン朝下イランにおけるオルトクとその交易活動
11. 白岩 一彦 ラシード・ウッディーン『ガザン史』挿画入り写本について——タシュケント写本 (Bīrūnī 1620) を中心に
12. 林 則仁 15世紀ペルシア細密画における“Turkman Style”の成立過程をめぐって——様式の起原と初期発展

## 第5会場

1. 田中 英資 文化遺産の保護と破壊を分けるのは何か？——トルコにおける古美術品の不法取引問題を事例に
2. 田辺 理 ガンダーラの仏教彫刻における娼婦と娼館——男性の顎に手で触れる女性と鏡を見る女性を中心に
3. 影山 悦子 ウスルシャナの都城址カライ・カフカハ I 遺跡から出土した壁画について
4. 土谷 遥子 プグッチ遺跡聞き取り調査 (2008) に関する現地調査 (2009) ——パキスタン北部地方ダレル渓谷と『法顕伝』陀歴仏教寺院
5. 高橋 圭 1890年代エジプトにおけるタリーカ批判とナショナリズム
6. 福永 浩一 ハサン・パンナーの論考集に見られる歴史叙述の特徴——初期ムスリム同胞団における思想についての予備的考察
7. 岡戸 真幸 地方出身者の社会的ネットワーク構築のあり方——エジプト都市部の同郷者団体を中心にして
8. 蓼沼理絵子 ミムナーに見る現代イスラエル社会の共生と共食
9. 貝原 哲生 6-7世紀ナイル中流域における宗教的対立の展開——上エジプトとの比較から
10. 石川 博樹 ハム仮説とエチオピア——19世紀中葉イギリスの人種論におけるエチオピア
11. 岡田 真弓 イスラエルにおける国立公園／自然保護区の成り立ち——法整備と国土開発の視点から見た文化資源

## ポスターセッション

1. 西秋良宏・門脇誠二・下釜和也  
ユーフラテス河中流域の先史遺跡——第四次踏査報告
2. 久米正吾・沼本宏俊 テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡 (前期青銅器時代) 直近墓地の発掘調査 (2009年)
3. 近藤二郎・菊地敬夫・柏木裕之・河合望・西坂朗子・高橋寿光  
テーベ西岸岩窟墓第47号 (TT.47) の調査

4. 吉村作治・近藤二郎・河合望  
エジプト、メンフィス・ネクロポリスの文化財保存面から観た遺跡整備計画の学際的研究——2007～2009年度中間報告
5. 菊地敬夫・犬井正男・佐藤真知子・吉村作治  
アメンヘテプ3世王墓の埋葬室に描かれた壁画の史料化に向けたデジタル画像化
6. 吹田 浩  
日本・エジプト合同マスタバ・イドゥート調査ミッションの活動と特色 (2003-2010)
7. 永井 正勝  
古代エジプト神官文字の画像データベースについて
8. 貝原 哲生  
6-7世紀エジプトにおける教会とその社会的影響力——オクシュリンコス、ファイユームを中心に
9. 関廣 尚世  
カジュバルダム水没危機遺跡からみたスーダン考古学の現状と課題

#### 研究発表要旨

(以下の要旨は、大会後に発表者に改めて執筆を依頼したものであり、大会で配布された要旨集に掲載されたものとは異なる場合があります。)

##### 第1会場

##### 1. 南レヴァント地方、後期新石器時代の石器インダストリーと石刃製作——アル＝バサティン遺跡の接合資料から——

門脇 誠二

西アジアにおける後期新石器時代の編年や社会経済に関する考古学的記録は未だ少ない。物質文化の特徴に加え、技術や生業、居住形態や社会組織が前期と後期新石器時代のあいだでどのように変わったのか、あるいは共通していたのかを比較することによって、初期農耕社会の歴史の変遷の解明に貢献できると思われる。

このような目的の下、発表者は北ヨルダンのジクラブ渓谷において後期新石器時代の遺跡調査に参加している(代表: E. B. Banning, トロント大学教授)。この地域では、紀元前6千年紀中頃(C14年代較正值)に居住された小規模遺跡(1haほど)が複数発見されている。この内、タバクト・アル＝ブーマ遺跡とアル＝バサティン遺跡の発掘調査の結果、どちらの遺跡においても穀物栽培と家畜飼育を生業の主体とした集落が営まれており、この2遺跡のあいだの物質文化は他の地域に比べてお互いに類似している傾向が認められた。この見解に基づき、ジクラブ渓谷のような一定の地域内に複数の小型村落が分散して地域共同体を形成するのが後期新石器社会の特徴の1つであるというモデルを提案し、その検証を進めている。

本発表は、アル＝バサティン遺跡から出土した打製石器の集中部について紹介し、そ

の出土コンテキストと技術分析の結果について議論する。石器集中部は、少なくとも10m<sup>2</sup>の石敷き床の一部において床面直上で発見された。石敷き床の上には、このほか完形の磨石や磨製石斧が発見されており、石器製作のワークショップというよりは複数の活動が行われた世帯空間であったと解釈される。

発掘された石器集中部から230点ほどの資料が回収された。この資料には8つの石核が含まれ、13の母岩タイプが同定された。資料全体の内、30%以上が接合資料に含まれる。こうした技術分析の結果、拳サイズの角礫を素材とし単打面の石核から縦長剥片や石刃を剥離する比較的単純な剥片剥離技術が行われていたことが示される。こうした技術は前期新石器時代の石刃製作技術に比べて非常に単純であるが、縦長剥片や石刃を鎌刃の素材として選択する傾向が明らかに認められる。

アル=バサティンの石器集中部資料は、前期新石器時代の末に専門的な石刃製作活動が衰退した後、分散した小型村落において継続・増加する農耕活動の重要性に対応して、より効率的な鎌刃製作を行うために、世帯領域において石刃製作が再度出現してきた過程を示すと解釈することができる。

## 2. ヒツジ遊牧の起源——ヨルダン南部ジャフル盆地の水利遺構調査から——

藤井 純夫

西アジアにおけるヒツジ遊牧の起源は、まだよく分かっていない。現在確認できているのは、1) ヤギ・ヒツジの家畜化が、「肥沃な三日月弧」内側の定住農耕集落で、先土器新石器文化Bの前・中期（紀元前8,500～7,500年頃）に始まったこと、2) シュメール・アッカドの粘土板文書（紀元前2,500～2,000年頃）が、「肥沃な三日月弧」周辺の遊牧民について初めて記録していること、3) これにやや先行して、前期青銅器時代の初頭には遊牧民による大規模ケルン墓群の造営が始まっていること、4) 従ってこの4～5千年の間に遊牧化が進行したと考えられること、だけである。先土器新石器文化B末（紀元前7,000頃）における定住農耕集落の縮小・廃絶現象が遊牧化の動向を反映していると言われているが、これはあくまでも間接的示唆に過ぎない。周辺乾燥域の中で初期遊牧民の具体的な足跡を確認・追尾しているわけではない。

本発表では、近年調査したヨルダン南部のワディ・アブ・トレイハ遺跡（Wadi Abu Tulayha）およびワディ・クワイール遺跡（Wadi al-Quwayir）の水利遺構を基に、レヴァント地方南半におけるヒツジ遊牧の成立過程を追跡する。一連の調査によって、1) 先土器新石器文化B中期に周辺ステップへの移牧（transhumance）が始まっていたこと、2) 移牧先の季節的出先集落には貯水槽（cistern）や貯留式灌漑農耕用ダム（basin-irrigation barrage）などの水利施設が備わっていたこと、が判明した。注目すべきは、3) 先土器

新石器文化B後期末(紀元前7,000年頃)に出先集落と貯水槽がほぼ同時に放棄されたこと、4) 放棄によって半ば埋没した貯水槽の内部に短期間逗留した集団があったこと、である。この集団こそは、固定的移牧拠点の維持・運営を断念した最初の牧畜民という意味で、ジャフル盆地最古の遊牧民と定義できるであろう。事実、ジャフル盆地ではその直後に初期遊牧民に固有の墓域(擬集落)が出現している。移牧から遊牧への流れを具体的に追尾し得たという点で、本調査の意義は大きい。

### 3. 中期青銅器時代終盤から後期青銅器時代にかけての南レヴァントにおける防御施設に関する考察 間舎 裕生

本発表の目的は遺跡の防御施設の検討を通して後期青銅器時代の南レヴァントの様相を考察することである。南レヴァントの後期青銅器時代はエジプトの新王国時代にあたる。新王国時代のエジプトはアジアへ幾度も遠征を行い、支配下に置いていたと考えられている。その結果南レヴァントは都市が荒廃し、エジプトの支配政策によって防御施設の建設が許されなくなるという説が一般的である。しかしこれらの説は少数の遺跡の調査結果に基づいて南レヴァント全体に一般化されているものである。そこで今回は南レヴァントの全ての遺跡を対象にその説の妥当性を検討する。

南レヴァントには中期青銅器時代ⅡC期から後期青銅器時代ⅡB期までの間の遺跡として63箇所が報告されている。それらを防御施設の有無に焦点を当てて層位的に検討を行った。その中で中期青銅器時代・後期青銅器時代共に防御施設を持つ遺跡は、ハツォルやメギドなど17箇所であった。後期青銅器時代になってから防御施設が建設される遺跡はテル・アブ・ハワムなど3箇所と比較的少数である。従来は後期青銅器時代に防御施設を持つ遺跡はハツォルのみとされていたが、それ以外の遺跡も防御施設を持つことがわかった。

この他は後期青銅器時代に防御施設を持たなかった遺跡であり、大多数がここに分類される。したがってこういった傾向のもとに今までの研究がなされてきた可能性はある。しかしその中には層位の解釈に関して議論のあるものもある。たとえばイェリコは層位的に検討した結果、防御施設の存在を完全に否定することはできない可能性が指摘できた。

次に遺跡の分布を検討した結果、後期青銅器時代に防御施設を持つ遺跡の多くは、地中海沿岸の平野部に位置していることが明らかとなった。地中海沿岸部はエジプトとシリアとを結ぶ交易路が通っており、エジプトによる支配の中心であったと考えられている。しかしそこに防御施設を持つ遺跡が多く分布するということは、従来の説では説明がつかない。

以上をまとめると、後期青銅器時代に防衛施設を持つ遺跡は少なからず存在し、その多くはエジプトの影響下にあったとされる地中海沿岸部に位置する。これらのことからエジプトが南レヴァントの支配政策として防衛施設を造らせなかったという従来の説は確かなものでないということが指摘できる。

#### 4. エーゲ海青銅器時代に於けるパピルス文様の受容と展開——特に前15世紀後半の土器様式の問題に関して—— 土居 通正

水辺に叢生するパピルスを図案化したものは、既にエジプト古王国時代のレリーフに見られ、下エジプト、ナイルデルタ地帯を象徴する重要なモチーフであったが、後期青銅器時代になると、その自生について不明なエーゲ海地域に於いても壁画に描かれ、また土器の文様として百合の文様の要素をも取り込みながら、多様に展開、発展し、前15世紀には、ギリシア本土各地のトロス墓から、クレタ島ではクノッソス宮殿とその周辺から出土する大形の壺を飾る文様の一つとして盛んに用いられた。クノッソスに於けるこの種の壺の盛行は、ギリシア本土の影響と考えられているが、同時期（LH II B 期）のギリシア本土の例は僅かで、発掘による資料の増加に待つとされて久しい。しかし本発表では、両地域のこれらの壺を飾るパピルス文を詳細に比較検討した結果、LH II B 期に比定されるべきものを、その前段階（LH II A 期）に分類されているものの中に指摘した（最近公刊の膨大なミケーネ土器資料の地域ごとの集成でも、当該の土器がLH II A 期の大形の壺の代表例として掲載されている）。

エジプトの場合と同様、エーゲ世界のパピルス文も、房状の花序は側縁が凹湾する扇形で表されるが、その内側の充填の仕方ではA、B、Cの三タイプに分類した。Aは外縁に向かう弧線を重ねて充填したもの、Bは中心の軸、或は基部と外縁を繋ぐ線を重ねて充填したもの、CはAの弧線の重なりを矢羽根状に角張らせた形にして充填したものである。文様が簡略化すると、その由来となった文様との繋がりが判然としなくなるが、Aタイプ、特にその簡略化したものは、普通「二枚貝文」として分類されている。しかしLM III B 期のピュクスに描かれた「二枚貝文」には、水を象徴する文様、そして鳥の文様と組み合わせられるその使われ方から、そのパピルス文としての性格が推測出来る。「二枚貝文」以外に、「交互同心弧線」そして今日疑義無く「連結巻貝文」と呼ばれているものに就いても、AタイプとCタイプのパピルス文から夫々派生したものであることを本発表で明瞭に示した。これらはLM III 期の様々な器種の土器に描かれ、陶棺上では、パターン化しながらも明らかなパピルス文と同様、屢々大きく扱われている。クレタ島後期青銅器時代に於けるパピルス文の役割は、普通一般に認められている以上に大きなものであったと考えられるのである。

## 5. ホセナバード遺跡（イラン）出土暗色磨研土器の再検討

大津 忠彦・有松 唯

イラン北部の山岳地帯では、青銅器時代（前4千年紀～2千年紀初頭）の物質文化は特異な暗色磨研土器によって表象される。黒色や灰色を呈し薄手で硬質、器面を極めて平滑にした精製土器群である。広域に分布するなかで、自身は斉一ながら地域ごとに異なる土器群と共存する点も特徴的だ。

ホセナバード遺跡はこうした暗色磨研土器がとりわけ多く出土するイラン北東部にある。今回、未発表だった出土土器（テヘラーン国立博物館所蔵）を再検討した結果、暗色磨研土器の初期段階並行（前3500～3000年頃）であることが明らかになった。特に検出層位中の最下層はこの土器群の出現期、他遺跡での「断絶」段階に相当する可能性が高い。未だ研究途上にある出現過程や広域分布の背景を考察し得る重要な資料と言える。ホセナバードでは暗色磨研土器も含めた複数の土器群の段階的変化がおえる。最初期には鈳物質混和材を多量に含む粗製土器、植物質混和材入りの粗製土器、彩色土器、暗色磨研土器があった。暗色磨研土器の割合は低い。その後、徐々に暗色磨研土器と無文精製土器が増加していく。そして暗色磨研土器が大半を占めるのと同時期に赤地黒彩土器が出現して多数になり、上層ではこの彩文土器と暗色磨研土器がほぼすべてとなる。

また暗色磨研土器自体についても複数の変化が指摘できる。まず形態的变化として、器種の多様化と装飾の多用化が起こる。そして、なかでも上層で高坏や装飾的要素が増加した背景には、この土器群の機能的変化も想定すべきだろう。技術的变化は特に最下層の様相から推測できる。ここでの暗色磨研土器は器面調整がやや粗くあまり光沢を伴わない。また相対的に軟質で、焼成も上層の資料とは若干異なっていたようだ。さらに同様の黒色土器ながら彩色土器に分類し得る一群と共存していた。関連性は検証の余地があるけれど、最下層での両者の共存は暗色磨研土器の起源を考える上で興味深い。

こうしたホセナバードの土器変化からは、暗色磨研土器の出現自体、ある程度段階的なプロセスだったという解釈が成り立つ。そしてそこでは技術的变化や機能的変化といった質の異なる複数の段階を経ている可能性がある。また従来の研究では彩文土器から暗色磨研土器へという土器変化のモデルがあった。しかし、ホセナバードでは彩文土器が出現する以前から暗色磨研土器が存在していた可能性が高い。彩文土器の出現についても議論していく必要があるだろう。

## 6. 古代西アジアにおける鉄器時代物質文化の変容

足立 拓朗

西アジアの紀元前1千年紀には世界帝国と呼ばれる巨大な国家が誕生した。この世界帝国の起源については、新アッシリアあるいはアケメネス朝ペルシア、またアレクサン

ドロス大王のマケドニア王国が候補として考えられてきた。また帝国という概念・あるいは用語についても、古代西アジア史において様々に使用されている。本発表では、世界帝国、帝国という用語を「広域国家」という新しい枠組みで定義する。初期国家の形成過程は、一般に遊動的狩猟採集民集団、分節社会（部族社会）、首長制社会、国家という4段階で述べられ、国家は都市国家、領域国家の形態をとると推定されている。本発表で提案する広域国家は、領域国家が発達したものであり、その起源を前8世紀後半の新アッシリアと想定している。この領域国家から広域国家への変化を紀元前1千年紀前半（鉄器時代）の物質文化を通して解明するのが本発表の目的である。

分析の結果、本発表で扱った様々な物質文化は、全て前9世紀に大きな画期が認められる。そして、その変化の源流は、新アッシリアの中心地であるメソポタミアではなくレヴァントやイランなどの周縁地域で起こっていることが明らかになった。前8世紀後半の新アッシリアの西アジア統一以前に物質文化の変容と拡散、衰退などが認められることを指摘できた。このことから、広域国家の成立は、その中核地域だけでなく、その周縁地域の変容を視野に入れて考察すべきものであることを提示した。

## 7. 北西シリア鉄器時代の地方神殿——テル・マストゥーマの事例の再検討——

西山 伸一

鉄器時代Ⅱ期 (ca. 900-700 BCE) の北西シリアは、各地に勃興した小国家群がお互いに競い合いながら、新アッシリア帝国とも駆け引きを展開していた。これらの小国家の社会・政治構造などについては不明な点が多くある。これに考古学資料からアプローチする一つの試みとして、地方集落の「神殿」に注目した。ここでいう神殿は、単に宗教的側面をもつだけでなく、集落の日常生活に根ざした経済的側面も合わせ持つものと仮定する。

本発表では、テル・マストゥーマで出土した大型建造物 (House b4-1: Block 4) の構造と出土遺物を検討した。構造上は、近郊のアフィスから出土している三列構造の神殿といくつかの類似点が指摘できる。さらにより類似する事例として、南レヴァントの Tel-Miqne から出土した Temple Complex 650 を提示した。マストゥーマの建造物とは、特に中庭、列柱部屋、工房についてその配置と構造に類似が見られた。

遺物については、祭祀に関連したと思われる土器（赤色スリップの大型土器、祭祀スタンド）や、出土土器の器種構成を検討した。しかし、遺物に関してはコンテキストの明確でないものも含まれ、さらなる検討は難しい。とはいえ、構造上の特殊性と少なくとも他の住居とは異なる器種構成の土器が出土していることを考えると、この建造物が神殿兼日常の共同作業場として機能していた可能性は高い。今後は、この建造物の集落

内での立地の変遷を復元し、そこがどのような目的で使用されてきたのかが建造物の機能を解明する一つの鍵となるだろう。

これが意味するところは何であろうか？ 一つのヒントが Zakkur 碑文にあると考える。この碑文には、「領土の各地に礼拝施設を建造した」と読める可能性のある箇所がある。マストゥーマ近郊の王都のあるテル・アフィスで見つかったこの碑文の内容が正しいとするならば、地方集落の神殿は、各小国家の王都にある神殿と強い関係をもちつつ機能していた可能性がある。鉄器時代の新しい集落形態は、村落や町が青銅器時代よりも高い独立性をもっていたといわれている。地方神殿を通して、地方集落は都市と結びつき、また地方集落は、この神殿施設を核として集落を形成していたのではないだろうか。そして、「神殿」を各地方集落に配置することは、小国家が激動の鉄器時代を乗り越えてゆくための統治形態の一端であったのではと考える。

## 8. アッシリア美術における物語絵画の構図と様式に関する考察——アッシュルバニパルの王宮浮彫に使われた構図について——

渡辺千香子

本発表は、新アッシリア時代の王アッシュルバニパル（前668-631/627年頃）の王宮浮彫りに使われている二種類の構図（様式）に注目し、それぞれの構図が意図する物語の表現効果、ならびに特定の構図が選ばれた背景について考察することを目的とする。アッシュルバニパルの時代に制作された浮彫り作品は、主にニネヴェの北宮殿と南西宮殿から出土している。王宮浮彫りには、「歴史的事件」や「王の狩猟」がテーマとして描かれ、それらはアッシリア帝国の政治的プロパガンダを内外に発信する機能を有する。浮彫りは単なる観賞のための装飾ではなく、見る者に特定の物語やメッセージを単刀直入に伝える使命を帯びていた。このため、浮彫りの構図には、美術的な観点から様々な工夫が凝らされた。

特にアッシュルバニパルの浮彫りでは、個別の物語を効果的に表現するため、二種類の構図が使われている。第一に、「線的な構図 (Linear arrangement)」ないし「連続する様式 (kontinuierende Stil)」と呼ばれる手法が挙げられる。これは、順を追って物語の展開を段階的に説明する異時同図の描写手法である。代表的な作例は、「ティル・トゥーバの戦い」(南西宮殿33室出土)と「王の狩猟 (ライオン・ガゼル)」(北宮殿S室・S<sup>1</sup>室出土)がある。第二に、「中心に向かう構図 (Centric arrangement)」が挙げられる。これは描かれた人物や事物のベクトルが画面の中央に向かって配置される構図であり、いわゆる「シンメトリー (左右対称)」は、この構図の典型的な作例である。厳密な意味でのシンメトリー構図は装飾芸術に多く見出されるが、物語を表す浮彫りではむしろ稀で、構図全体が緩やかに中央に向かう流れを持つものが多い。

アッシュルバニバルの浮彫りには、これら二種類の構図が見出されるものの、「線的な構図」で表現された作例は少ない。歴史的にも、この技法で制作された作品がまとめて知られるのは、同王の時代に限られる。特に、北宮殿においてこの構図が使われているのは、「西表玄閤」として機能したS室、ならびにその階上にあつたとされるS<sup>1</sup>室に限定される。北宮殿における浮彫り制作の順序、ならびに各広間の浮彫りを担当した芸術家の流派など、アッシリア王宮浮彫りの制作過程については、依然として多くの謎が残される。

## 9. 有翼鷲頭精霊モチーフに関する一考察

四角 隆二

新アッシリアのアッシュルナツィルパル2世(前883-859年)が造営したニムルド北西宮殿はレリーフで飾られていた。レリーフには様々な有翼合成獣図像がみられるが、本発表ではアブカル Apkallu と呼ばれる精霊のうち、猛禽の頭部をもつ精霊図像を扱う。有翼鷲頭精霊図像の頭部は一般にワシとされてきたが、近年クロハゲワシとする説が出された。本発表ではニムルド北西宮殿を飾ったレリーフと、その他工芸品に見られる有翼鷲頭精霊図像に見られる猛禽図像のモチーフを比較検討する。

アッシリア・レリーフは写実的な表現で知られる。ハクスレイ Huxley, M. によれば、有翼鷲頭精霊のモデルが「クロハゲワシ」であることの根拠として①顔に羽毛表現が見られない、②冠毛の形状、③嘴の下の三角形の羽毛表現、④目の上の盛り上がり、をあげている。発表者は、岡山市立オリエント美術館が所蔵する有翼鷲頭精霊像浮彫(ニムルド北西宮殿 room I-16)の図像表現とクロハゲワシ剥製を比較し、⑤クロハゲワシに特徴的な「耳羽」の表現をその根拠に加え、ハクスレイの主張を支持する。

ニムルド北西宮殿のレリーフ全体に分析対象を広げると、管見にはいる全ての有翼鷲頭精霊図像が上記特徴を備えていた。ただし、room I, room H 以外のレリーフに表された有翼鷲頭精霊図像では「耳羽」表現の便化と頭髪表現の変化が確認できた。

次に円筒印章、象牙製品、金属器などの工芸品に表された有翼鷲頭精霊図像を検討したところ、これらには「クロハゲワシ」と断定するに足る特徴を備えた例はほとんどみられず、「猛禽」と理解されるにとどまった。

アッシリアの有翼鷲頭精霊図像は前2千年紀半ばの円筒印章に初現するが、盛行するのは前9世紀のアッシュルナツィルパル2世の治世以降である。一方、メソポタミアでは猛禽の要素を持つ合成獣図像は伝統的に少ない。以上から有翼鷲頭精霊図像は、アッシリアの西方拡大に伴って東地中海周辺地域に伝統的な鷲グリフィン図像がアッシリアの精神世界に取り込まれる過程で、ユーラシア最大の猛禽で北メソポタミアに生息するクロハゲワシをモデルとして成立した可能性を指摘した。また、北西宮殿浮彫りにおける

有翼鷲頭精霊凶像の凶像表現の変化はこうした外来要素の「アッシリア化」の過程を反映している可能性がある。

#### 10. ローマ時代のデカポリス都市——ガダラとゲラサの盛衰—— 江添 誠

共観福音書の中で混同されているガダラとゲラサはともにデカポリスとよばれるおよそ10から成る都市群に属していたと考えられている。デカポリスの都市は反ユダヤの立場からローマの進出に協力的で、ローマの軍事拠点となっている都市が多く、その結果、ローマによる恩恵を受け、属州支配の初頭からローマ都市への発展を遂げている。ガダラもゲラサも都市の形成、発展にローマが大きく寄与していた点は共通であるが、その時期には差がみられる。

ヨセフスの記述において、ガダラは前63年のポンペイウスの東方遠征時に彼の解放奴隷の出身地であったために、破壊された都市が再建されたと述べられている。後66年の第1次ユダヤ戦争においても、いち早く使者を送り、ローマの守備隊によって都市が保護されている。一方、ゲラサは直接ローマと関わっていることを示す記述はなく、ナバテア王国の勢力下にあったと思われる。

考古資料もヨセフスの記述を裏付けるような状況を示している。ガダラはヘレニズム時代よりアクロポリスを取り囲む城壁によって要塞化された都市であったことが城壁の層位的な研究により明らかになっている。また、紀元前1世紀の市門の周辺には高精度に切り出された玄武岩によって精緻に組まれた壁が見つかっており、ポンペイウスの再建によるものと考えられている。一方、ゲラサはヘレニズム時代の要塞の痕跡も紀元前1世紀のものとされる遺構も見つかっておらず、都市の形成は後1世紀以降と思われる。

第1次ユダヤ戦争を経て、後2世紀初頭の属州アラビアの成立と新トラヤヌス街道の敷設は二つの都市のプレゼンスに大きな変化をもたらしたと考えられる。新トラヤヌス街道敷設によって、南北の交易ルートはヨルダン川周辺から大きく東側へと移行し、街道により近いゲラサは交易の恩恵を受けて都市が拡張していったと思われる。129年のハドリアヌスの属州巡幸の際には越冬地としてゲラサに滞在しており、凱旋門をはじめとして、劇場、神殿などが次々と2世紀に建設されていることからこの時期の急速な発展がうかがえる。

このような発展段階の差異をみるとガダラとゲラサが属していたと考えられているデカポリスにヘレニズムからローマ時代にいたる継続的なまとまりを見ることはできず、第1次ユダヤ戦争時に反ユダヤの立場にあった都市群が一時的にローマの庇護を得るためにまとまったと考えるのが妥当であろう。

## 11. ユダ式柱状土偶とアスタルテ

杉本 智俊

鉄器時代後半のイスラエル南部から広く出土する「ユダ式柱状土偶」（以下 JPF）は、しばしば豊穰土偶と解釈され、青銅器（カナン）時代のアシェラ女神崇拝がユダ王国時代に継続していたことの証拠として用いられてきた。しかし、この同定はかならずしも十分な証拠に基づいていないので、本発表では JPF の出土状況、形態分析を通してその性格を再検討する。

まず JPF の出土状況を見ると、ほぼすべての出土例が前 8 世紀以降のユダのものであり、前 12 世紀から前 9 世紀にかけて 400 年間ほど同種の土偶が一切出土しない期間が存在したことを指摘できる。このことは、仮に JPF が豊穰女神を表していたとしても、単純に青銅器時代のアシェラの継続と見なせないことを意味する。アシェラ崇拝の継続を示すとされる他の考古資料、銘文資料、聖書資料の証拠が十分でないことも、この理解と合致している。むしろ JPF は、「天の女王」崇拝と関係していたと考えるべきであろう。「天の女王」は、一般にアスタルテあるいはアッシリアのイシュタルがこの時期新たにユダ王国に導入されたものと理解されている。パピロニア捕囚直前の預言書、エレミヤ書に突然登場する点も、JPF の特異な出土状況と一致する。

JPF の形態を見ると、円盤を持った変異が存在することを指摘できる。JPF 以外の「円盤を持った女性像」がアスタルテ崇拝と関係していたことは、すでに発表者が別の場所で示した。同じ持物を持った土偶を同じ方向で理解することは自然であろう。また、JPF の中には、あきらかに両性具有に描かれているものがあり、通常の JPF の中でもその可能性が考えられるものが少なくない。イシュタルはしばしば男性神と女性神のセット、あるいは両性具有として理解されることが知られており、JPF の現象と合致している。豊穰女神のアシェラにそのような可能性は考えられない。

以上から、JPF は前 8 世紀のユダに新たに導入された「天の女王」崇拝、すなわち特殊な形のアスタルテ崇拝と関係していた可能性が高い。これらを実証することは困難であり、カナン宗教の直接的な影響は想定すべきでないであろう。

## 12. オリентにおける曲面組積の工法とその地域性について

岡田 保良

この研究は、2005 年度から 5 年間継続された「セム系部族社会の形成」という科研領域研究（代表・大沼克彦）の枠組みの中で、建築学的アプローチを試みた計画研究課題「古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究」の成果の一部である。具体的には、ユーフラテス中流域を中心に、広くイラン西部から地中海東沿岸に至る西アジア一帯の空間を「横軸」に、歴史的には遠く先史の時代から古代の諸文明を経てイスラームの文化が浸透するまでの連続的な時間を「縦軸」に想定し、石造・煉瓦造など

「組積造」による上部構造が比較的良好な状態で観察できる建築遺構を網羅し、技術の系譜とその地域性を捉えなおすことを目的とした。レバノン、ヨルダン、シリア、イラン南部に遺跡を訪ねた。以下に組積造によるドーム架構に関して得られた知見をまとめる。

- レバノンでは青銅器時代以降、沿岸部では石造を主体とし、前6世紀にペルシアが到来するまでその建築組積技術はきわめてローカルだが、ペルシアを経てローマの領域下で汎地中海的組積術が定着。バールバックという傑作を生むプロセスを確認した。
- ヨルダンでは、煉瓦造やコンクリート構造が普及するはローマ盛期にも、一貫して切り石組積によるドーム架構が追及されたことを実証。ローマ系の切石造ペンデンティヴ型ドームの事例が確実に遺存していることを確認し、ハギア・ソフィア型（ビザンチン型）ドームの成立過程の問題に重要な例証を得た。
- シリアでは、近現代にまで広く見られた日乾燥瓦輪積みによるクッパ住居の成立について、いまだ明瞭な考古学的実証研究が不足していることを認識するとともに、ヘレニズム以降、ヨルダン地方に準じた切石組積の伝統をキリスト教建築の中に追うことができた。
- イランでは、サーサーン朝王宮建築およびゾロアスター教チャハルタークの組積を詳細に観察した結果、粗く割った扁平な石材をリング状に積む組積の基本形式を認めるとともに、おそらく4世紀の創建とされるカラ・エ・ドフタルのスキンチ式ドームに先んずると見られるドーム遺構は確認できなかった。
- サーサーン朝に見る大型ドームとローマ系ドーム架構との影響関係について、かつてローマによるペルシア技術の模倣という仮説が提示されていたが、上記ペンデンティヴ技法が2世紀代には実現していたことが確実となり、過去の仮説に再検討を迫るという課題を生じた。

## 第2会場

### 1. ウナス王のピラミッド玄室に刻まれた幾何学文様について 中野 智章

古代エジプト文明期に制作された彫像の中で、王像にのみ記される連続菱形文の意味と役割について一つの仮説を示した。この連続菱形文に関しては、これまでに何人かの研究者がその存在について述べているものの、管見に及ぶ限り、その意味について詳しく論じられたことはない。それは、この文様が当時の王宮の外観を表したとされる、いわゆる「王宮ファサード」の一文様に過ぎない、との見方に依るところが大きいと思われる。しかしながら、その文様の記され方を注意深く観察してみると、この連続菱形文はファサードに描かれた文様の中でもとりわけ大きくかつ重要な位置を占め、そこには

何らかの象徴的意味が与えられていた可能性が高いと推察される。

そこで発表者は、その連続菱形文を含む、第5王朝末ウナス王のピラミッド玄室に描かれた王宮ファサードが、第6王朝に入るとピラミッド・テキストへと変化する点に着目し、

1. 連続菱形文が刻まれた位置は、女神ヌートに関するテキストに取って代わられること、
2. 王宮ファサード以外に連続菱形文が記される例は雌の動物に限定されること、
3. ライオンや牛といったそれら動物はいずれも女神ヌートの化身と考えられていたこと、

などから、この連続菱形文はもともと女神ヌートの表象として用いられていたのではないかとの仮説を示した。また、毎年ナイル川の氾濫期にピラミッドがナイルの水面に映り、本体と合わせて菱形の形状を採る構図も、この連続菱形文、すなわち女神ヌートを表していた可能性があることを指摘した。

## 2. ギザのケントカウエス女王墓のデータ収集と考古的解析

河江 肖剰

本発表はエジプトのギザ台地に建造された4500年前のケントカウエス女王墓の3D（3元）形状計測データを、考古的知見に基づき解析する研究方法とその結果についてである。

巨石建造物のビジュアルな記録方法はこれまで写真と、線画という記録者によって「選択された」2次元情報に限られてきた。しかし、発表者が参加したギザ・レーザー・スキャニング調査プロジェクト（GLSS2006）では、新しい研究手法である3D形状計測機器を用い、遺跡の3D形状データを取得している。墓外部の計測はリーグルのLMS-Z420iを用い、計55ヵ所の地点から外観中心に、その周辺域を北は岩窟墳墓から南はマアディ累層まで計測した。墓内部の計測は中距離測定に適しているLMP-25HAによって行われた。そして緻密さが要求されるレリーフや碑文などはコニカ・ミノルタのVIVID910を使って計測された。

3D形状計測の導入は、データの取得と人文的解釈の区分を意味し、これによって考古学というこれまで実証が極めて困難だと思われていた領域においても自然科学的アプローチを可能にさせた。人的な解釈を最小限に抑えられたその3Dデータは、学術的に生データとして価値があるが、得られたデータの真価は解析にある。

調査で得られたケントカウエス女王墓の3D形状計測データの考古的解析によって、正確な石材量や建造方法のシミュレートを行うことができ、ひいては三大ピラミッド造営という国家プロジェクトの終焉後における建造技術の変化についての研究が可能とな

る。

現在第一段階として、ボリューム計算テストが行われている。データの表面形状の確度を保つため、ボクセルによる点群データを細分化・再サンプリング、8分木データ構造による階層的な密度と位置管理を行っている。これに加え、3次元モルフォロジ処理を利用し、計測データの欠損箇所を補間し、ボリューム計算が行われている。

\* GLSS2006 は米国古代エジプト調査協会 (AERA, 代表: マーク・レーナー) の主導のもと、エジプト考古評議会 (SCA), 東京工業大学, 大阪大学, 元興寺文化財研究所, 東北芸術工科大学のチームによって行われた。ボリューム計算は関西大学と大阪大学の共同プロジェクトとして行われている。

\* 本研究の考古的解析は、財団法人松下幸之助記念財団の助成金で実施されている。

### 3. 葬送用コーンを利用した社会的地位の比較

銭廣 健人

葬送用コーンは、全体で646種類あると前回のオリエント学会で発表したが、この1年で新たに7種類発見され、653種類存在することが明らかになっている。それらは赤・青・白で着色されていたことが確認され、色彩的にきわめて人目を引く存在だったことが想像される。また、原位置は墓の入り口上部あるいは前庭部に大量に並べられていたことから色彩のみならず設置位置そして設置方法の面でもその存在をアピールしていた。平均で直径が6.3cm前後しかないコーンの顔面(底面)部分には、所有者の名前と、2.0~2.5個の所有者の称号が入る。中には100以上もの称号を持つ人物もいたことを考えるとこれは慎重に選抜された称号が表現されているとみてよい。

以上色彩・設置位置・設置数・顔面部面積の小ささから、コーン顔面部の称号は所有者が保有するうち最も社会的に価値の認められた称号が表現されていた可能性が高い。この仮説に信頼性が認められればさらに一步踏み込んで「コーンに選ばれた称号は、選ばれなかった称号よりもより価値のある称号である」という主張も成り立つ。現代の研究者の考えではなく、彼ら自身の考えではどの称号が社会的価値のある称号であったのかをコーンは教えてくれる。この性質を利用して称号同士を比較することにより、それぞれの上下関係を復元し、当時の社会構造を組み立てるのが今回の発表の要旨であった。

考察対象の時代はハトシェプスト女王~アメンヘテプ3世までである。当該時代を4分割し、それぞれの時期ごとに称号、ひいてはその所有者の社会的地位の変遷を追った。資料の質の関係から、分析に使用したコーンは65人分111個であった。

結果的には、それまでの先行研究が踏み込めなかった異分野同士の称号の比較やそれぞれの称号の時代ごとの栄枯盛衰を見極めることも可能になった。

一例として「王の右側の扇持ち」はアメンヘテプ2世~トトメス4世時代には「アメ

ン神の畜牛長」よりも下位の称号であったのに対し、トトメス4世時代～アメンヘテプ3世時代に入ると両社の上下関係が逆転している様が見て取れた。

このように葬送用コーンを利用する方法は従来の社会構造の復元方法が内包するさまざまな欠点を補うことを紹介して発表を終えた。

4. エジプト新王国第18王朝アメンヘテプ3世時代の岩窟墓について 近藤 二郎

上エジプト第4ノモスの中心都市テーベの西岸（現ルクソール市の対岸）は、ネクロポリス・テーベとよばれ、新王国時代を中心とする多数の岩窟墓が存在している。第18王朝アメンヘテプ3世（在位：前1388～前1351年頃）治世30年頃に、墓内に精緻なレリーフ装飾を持つ大型岩窟墓が出現するようになる。テーベのアメン神官団を牽制する王の政策により、北のメンフィスから派遣された高官とともに彼らの墓の造営に携わるメンフィス系の工人の移動が、こうした新たな型式の墓の出現の背景となっている。代表的な大型岩窟墓であるケルエフ墓（TT. 192）を例として取り上げ、前庭部周囲や前室、奥室に配された数多くの柱を持つ構造が、同時代に建造されたルクソール神殿の柱のある内庭、列柱廊、多柱室の構造と酷似しており、岩窟墓の前庭部、前室、奥室などの機能と神殿との機能の類似を指摘した。これらの岩窟墓の中で、アル＝コーカ地区にあるウセルハト墓（TT. 47）は、アメンヘテプ3世の王妃ティイの家令であった人物の墓で、1902年12月～1903年1月頃にクルナ村のオムダにより発掘調査が実施され、当時、エジプト考古局の上エジプト主任査察官であったハワード・カーターが考古局の年報（*Annales du Service des Antiquités de l'Égypte*）で作業報告を記している。それには岩窟墓の規模と構造に関する記載やウセルハトの葬送用コーン及びティイ王妃のレリーフの写真など掲載されている。しかし、カーターの報告した王妃ティイのレリーフは、ウェイゴールの1908年夏の岩窟墓登録作業時には発見されておらず、おそらく1903年から1908年の間に墓外に持ち去られ、ベルギーのブリュッセル王立博物館の収蔵品に加えられたと考えられる。それ以降、墓は厚い砂礫に覆われ、墓の正確な場所もいつしか不明となり、アクセスができなくなっていた。ウセルハト墓（TT. 47）は、アメンヘテプ3世時代の重要な岩窟墓であるにもかかわらず、正確なプランや構造が不明であるため、この墓の再発見・再調査が必要不可欠であるとの結論に至った。そのため、2007年12月からウセルハト墓の本格的な発掘調査を開始し、これまでに3次にわたる調査を実施した。第2次・第3次調査では、ケルエフ墓と類似したレリーフ装飾のある墓の入口部を再発見することができた。第4次調査の計画も紹介した。

5. アメンヘテブ3世王墓のアムドゥアト書について——王墓埋葬室の装飾としての  
視点から—— 菊地 敬夫

アメンヘテブ3世王墓の埋葬室の壁面に施されたアムドゥアト書の配置が、近年、早稲田大学古代エジプト調査隊によって報告された。そこで発表ではアムドゥアト書の史料化の重要性を指摘し、デジタル画像を用いてアメンヘテブ3世王墓のアムドゥアト書と埋葬室の関連について考察を行った。

アムドゥアト書の画像史料の構築では、次の点が肝要である。1) 図像とテキストの双方が示されること。2) 誤記、訂正、作業補助線などの“周辺情報”を含むこと。3) トランスクリプションおよび翻訳の表示。以下は、事前撮影調査によるデジタル画像を利用したアメンヘテブ3世王墓のアムドゥアト書に関する予察である。

- ・横書きテキスト：右から左へ、読み進める方向と反対から筆記された。
- ・縦書きテキスト：右側の行から左へ、読み進める方向と反対から筆記された。
- ・アムドゥアト書の長編の終わりは、意図した位置に計画的に配置された。
- ・アムドゥアト書の長編の始まりは、“現場あわせ”で配置がなされた。

これらのことから埋葬室の東壁に長編の第12時を配置することが、埋葬室の装飾において最優先事項であったと判断された。そこで、このようなアムドゥアト書の意図的な配置と王によるアムドゥアト書の専有性を関連づけて考察を続けた。

アムドゥアト書は冥界における太陽神の運行を保つため、太陽神官である王にのみ必要な情報を表わしている。意図的に東壁へ配置された第12時には、東の地平線から天空に昇る太陽神と、冥界にとどまるオシリス神に対する冥界の神々による礼拝の姿が図像で描かれ、両大神への言葉がテキストに記されている。これらは、冥界における祭祀の執行をうかがわせるものである。

第12時が描かれた東壁と、それに向かい合う位置にある2本の角柱の東面——西方の女神とアメンヘテブ3世が描かれている——によって囲まれたクリプト部分は、この祭祀を執り行う空間であると解釈された。そこに頭位を北に向けて置かれた石棺によって、王が太陽神の昇天に際して東壁のアムドゥアト書に描かれている神々と同じ方向を向き、太陽神とオシリス神への祭祀を執り行うことが暗示されている。このようにアメンヘテブ3世王墓のアムドゥアト書は、埋葬室の構造と石棺の配置とともに、冥界に祭祀空間を作り出す仕掛けであった。

\* 本発表は文部科学省科学研究費補助金（平成20～22年度、課題番号20401026）の成果の一部である。

## 6. アクエンアテン王の後継者をめぐって

河合 望

エジプト新王国時代第18王朝のアクエンアテン王の治世末期からトゥトアंकアメン王即位までの状況は依然として不明であり、これまで主に2つの説が提示されている。第1の説は、アクエンアテン王の治世末期に長女メリトアテンを王妃とするセメンカラーが共同統治を行い、アクエンアテン王の死後に単独統治を行ったとする説である。第2の説は、セメンカラーは実際にはアクエンアテン王の王妃ネフェルトイティで、ネフェルネフェルウアテンと名乗りアクエンアテン王の死後にメリトアテンを儀式的な「偉大なる王妃」とする王として短期間君臨したとする説である。本発表では、これまでの諸説と同時代資料を再検討し、アクエンアテン王の治世の末からトゥトアंकアメン王の即位の間に存在したと考えられる王の比定に関して、次のような私見を提示した。

アクエンアテン王は、治世第13年以降に即位名「アंकケベルウラー」を持つ男性のセメンカラー王を共治王として迎えた。セメンカラーはアクエンアテン王の第1王女メリトアテンを王妃とした。セメンカラー王の治世は1, 2年で、その後共治王となったのは、即位名「アंकケベルウラー (アंकケベルウラー)+形容辞」を持つネフェルネフェルウアテン女王であるとした。ネフェルネフェルウアテンの人物比定については、主にネフェルトイティ王妃とする説とメリトアテン王女とする説の2つがあるが、アクエンアテン王がセメンカラー王を迎えた治世第13年以降に、ネフェルトイティ王妃に関する記録が無くなり、アマルナ王墓からネフェルトイティ王妃の姿をしたシャブティ像が出土していることから、ネフェルトイティ王妃は他界したと考えられ、セメンカラーの死後に未亡人となったメリトアテンがネフェルネフェルウアテン女王になった可能性が高い。メリトアテンはセメンカラーの死後にネフェルネフェルウアテン女王(アクエンアテン王の王妃を兼ねる)としてアクエンアテン王と共同統治を行い、アクエンアテン王の死後少なくとも3年間単独統治を行ったと指摘した。これは、アクエンアテン王死後のアマルナ文書のエジプト側の宛先がマヤティ(メリトアテン)であることと、マネトンの『エジプト史』にある第18王朝末のアクエンケレス女王の後に弟のラトテスが即位するという記述が、メリトアテンの後に弟のトゥトアंकアメンが即位する状況に合致することからも補完される。

## 7. エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡のピットから出土した土器群について

高橋 寿光

本発表では、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(S)「エジプト、メンフィス・ネクロポリスの文化財保存面から見た遺跡整備計画の学際的研究」(研究代表者:吉村作治早稲田大学名誉教授)のプロジェクトの一環として行われたエジプト、アブ・シ

ール南丘陵遺跡（現場主任：河合望早稲田大学客員准教授）において発見された土器群の年代と性格について考察することを目的とする。

アブ・シール南丘陵遺跡の2009年度第19次調査では、イシスネフェルト墓の北側で発見されたピットから土器片が集中して出土した。ピットからは年代や性格を示す文字資料などは発見されておらず、土器群が年代や遺構の性格を判断する上での重要な資料となる。

整理作業の結果、ピットから出土した土器群は16個体が確認された。それぞれの土器の類例から、ピット出土の土器群は、第19王朝のラメセス2世からメルエンプタハの治世に年代づけられる。また土器群の性格に関しては、類似した器種組成がサッカラの第18王朝時代末から第19王朝の所謂「エンパーミング・カッシュェ」から出土した土器群に見ることができる。更にイシスネフェルト墓の出土土器と類似した器形、胎土が用いられていること、そして出土場所がイシスネフェルト墓に近いことなどから、ピットの土器群とイシスフェルトの埋葬に用いられた土器群との間に強い関連性を窺うことができる。こうした点を踏まえると、ピットはイシスネフェルト墓に付属するエンパーミング・カッシュェである可能性が最も高いと考えられる。

エンパーミング・カッシュェとは、ミイラづくりに関連する道具を納めた遺構であるとされ、新王国時代のエンパーミング・カッシュェとしては、これまで王家の谷の第54号墓、第63号墓、ユウヤとチュウヤ墓、マイヘルプリ墓、サッカラのホルエムヘブ墓、ティア墓の例などが知られている。エンパーミング・カッシュェから出土した遺物を再検討してみると、ミイラづくりに関連する道具のみが納められているわけではなく、埋葬時の儀式に使用した道具も納められている。こうしたことから、エンパーミング・カッシュェという用語は適切ではなく、この遺構は「埋葬儀式に使用した道具の埋納場所」と考えられ、アブ・シール南丘陵遺跡で発見されたピットは「イシスネフェルトの埋葬儀式に使用した道具の埋納場所」と結論付けられる。

## 8. エジプト・ダハシュール北遺跡2009年調査報告 吉村 作治・矢澤 健

吉村作治（サイバー大学学長、早稲田大学名誉教授）が隊長を務めるダハシュール北遺跡の調査隊は、これまでに「イバイ」、「パシェドゥ」、「タ」という人物の新王国時代のトゥームチャペルとその周辺に点在するシャフト墓、単純埋葬の発掘を行ってきた。2004年からは「タ」の墓周辺で調査を開始し、2009年も継続して行っており、中・新王国時代の埋葬が発見されている。

6～7月の第17次調査では、5基のシャフト墓の調査を実施した。主要な成果として、シャフト79では、中王国時代に年代付けられる、カバを象ったファイアンス製の像の断

片が出土した。シャフト107では、南側にある埋葬室から中王国時代の9個体に及ぶ大型丸底壺が完形かつ原位置で出土している。シャフト109では、西側にあったA室から木製の人形棺が発見された。全体が黄色に塗られ、鬘は黒色で表現されており、銘文帯はなく、赤線による襟飾りの下書きが見られた。胸の前で組んでいる腕は手の部分だけが表現されている。特徴から、第19～20王朝に年代付けられると考えられる。

10～11月に行われた第18次調査では、4基のシャフト墓の調査を実施した。主要な成果として、シャフト84では少なくとも3体の木製人形棺が確認されている。内2体は蓋が失われており、残りの1体の保存状況も悪く、半ば崩れている状態だった。一方で多数の木棺片を発見することができ、中には外面の碑文や図像が高浮き彫りで表現されているものがあるなど、本来は質の高い棺が埋葬されていたと考えられる。シャフト105では、多様な材質によるウジャトの眼やアミュレット、ビーズ、陶製のカノボス壺の蓋、アンフォラなど、新王国時代に年代付けられる豊富な副葬品とともに、盗掘者が用いたと考えられる後世の陶製ランプが出土している。シャフト106は中王国時代の墓であり、シャフト部分から高さ82cm、幅58.5cmに及ぶ石灰岩製ステラが発見されており、墓の上部構造として使用された可能性が考えられる。また、シャフト部および南側の埋葬室からは、杖を持って立っている人物が描かれた木製模型のドア、ファイアンス製の果物の模造品、カエルを象ったファイアンス製小像、石灰岩製のカノボス壺（蓋部分が3個体、身の部分が2個体）が発見された。カノボス壺には被葬者の名前が刻まれており、「キイ」という人物であったことがわかっている。

## 9. 後期青銅器時代の南レヴァントおよびヌビア地方における遺体の頭位方向

——エジプトの影響を焦点に——

和田浩一郎

本発表は、後期青銅器時代の南レヴァントおよびヌビア地方の考古学資料を用いて、これらの地域に強い影響力を持っていたエジプト新王国の埋葬習慣に関する傍証を得ることを目的とするものである。

古代エジプトの埋葬文化の中で、新王国時代はひとつの画期に位置づけられる。中王国時代に現れた人形棺の使用が主流となり、第18王朝にはその変化をうけて、遺体の埋葬姿勢が北向きの頭位を持つ側臥位から、西向き of 仰臥位に変化したと言われてきたのである。しかし発表者が以前行った考察では、明確に頭位が変化するのは王の埋葬でも第19王朝の後半であり、さらに社会的に中・下層に属する人々の場合には、西向きの頭位を実践していたのは、同一墓地内のせいぜい半数程度であることが明らかとなった。しかもこれら非エリート層の埋葬では、西でも北でもない方向に遺体を向ける例が相当数認められたのである。つまり西向きの頭位は、新王国時代の埋葬に一貫してみられる

特徴ではないということが見えてきたのである。むしろこの時代は、変化が進行する過渡期と位置づけるべきと考えられる。

このような時期にあって、エジプト人はどのような遺体の配置を「正しい」ものと見なしていたのであろうか。第19王朝後半に明確な変化が見られるまで、王墓では北と西が頭位の配置として並存していたことが推測された。つまり第19王朝前半までの遺体の配置には、二つの方位を共に取り入れるという折衷案が採られていたことになる。しかしこの王墓の事例だけでは、答えは不明瞭なままである。そこで今回着目したのが、南レヴァントとヌビア地方の埋葬資料である。

本発表では、南レヴァントの三遺跡（テル・アル＝アジュール、テル・エス＝サイデーエ、テル・アル＝ファラ）、および下ヌビアの二遺跡（ミルギッサ、ファドラス）の墓地における遺体の頭位方向を検証した。そしてヌビアの埋葬資料の状況から、エジプト新王国によって導入された頭位は、第18王朝初期から西であったことが明らかとなった。一方南レヴァントの資料からは、埋葬習慣にエジプトの強い影響が表れてくるのは第19王朝以降であり、しかもその影響は場所によってまちまちであることが窺われた。そこで南レヴァントにおける埋葬のエジプト化をより明確に把握するためには、埋葬姿勢以外の要素、特に副葬品の内容を詳細に検証する必要があることを述べた。

#### 10. エジプト西方デルタ地域の遺跡分布——ブハイラ県マハムディーヤ市の事例——

長谷川 奏・恵多谷雅弘

本研究では、サイス政権によるナウクラティスとカノプスを繋いだいわゆる王朝末期の流通構造の場において、アレクサンドリアを中心とするヘレニズム政権によって地域間ネットワークが掌握されていくプロセスの把握をめざしている。遺跡分布構造の転換を読み解くキー地域として、ブハイラ県を選定した。ここには、153の遺跡が分布しており、多くが未調査であるが、殆どが上層にはヘレニズム時代の活動痕跡を持つと推測される。私たちは、西方デルタの遺跡分布の特徴的な性格を、①海洋沿岸と内陸のメガシティ相互を繋ぐ流通、②西方砂漠の異域世界からの防衛、③砂漠と緑地を結ぶ広域国家の情報、の3つに大別して捉える成果を得てきたが、いずれも<線的>な移動に伴う理解であることは否めなかった。ところが、現地調査の折に興味深い観察結果が得られた。デリングート市の事例では、『エジプト誌』が記録された18世紀末は全く村落が分布しておらず、1960年代の衛星写真からは、この地域が低湿地であることが読み取れる。マハムディーヤ市の事例でも、『エジプト誌』では集落が無い部分に遺跡分布がみられる。19世紀半ばの地図からは、ここはイドゥク湖の湖面範囲が最大になった際の屹水線にあったと想定され、湖面ぎりぎりのところに、多くの遺跡が分布し、さらにイドゥク

湖の西側と、東側のブルス湖、マンザラ湖方面に繋がっていく。そこで、「潟湖環境」が新たな解釈のキーワードとなる。興味深いことに、デリンガート市とマハムディーヤ市では、1950年代でもまだ通年灌漑が及んでいない。バイスン灌漑と通年灌漑の双方を阻んできたのは、土中の塩分濃度であり、これらの地域では強力な排水事業が必要となる。近代灌漑史の側では、古代世界には強力な灌漑文明のイメージが先行してきたため、考古学との接点が欠けていた。私たちはこの地域で大規模な灌漑が行われていた可能性を否定するものではないが、もう一つの視点として、ヘレニズム時代には、潟湖(lagoon)の縁辺という非常に生活が困難な場でも、さまざまな生業(たとえば脆弱な漁業、手工業、農業の連結)を繋いだ経済ネットワークが作られ、それらを取り結んで、潟湖の〈面的〉な繋がりを維持していた「力」あるいは「知」があった点を視野に入れていきたい。これは分布を〈線的〉に捉えてきたこれまでの歴史考古学では見逃されていた視点と思われる。

### 第3会場

#### 1. ドゥムジアブズ神——女神から男神へ——

辻田 明子

女神のドゥムジアブズは、王碑文によれば、ラガシュ市キヌニル(キニルシャとも)地区の守護神である。男神のドゥムジアブズは、神名リストによれば、エンキ神の息子である。

ラガシュでは女神、エリドゥでは男神というように、ドゥムジアブズを崇拜される場所が異なる同一神とする見方がある。また、名前のゆえにドゥムジ(タンムズ)神とかわりがあるとみる解釈もあるが、ドゥムジ神との明確な関連はないと考えるのが現在の一般的な理解である。では、史料にみえるドゥムジアブズの姿とは、実際どのようなものだろうか。

女神のドゥムジアブズは、前3千年紀にはラガシュの有力な都市神であった。その崇拜は、ウル第三王朝滅亡後のラガシュの衰退に伴って、徐々に実体なり実質を失っていった。しかしその後も、文学テキストのなかでドゥムジアブズ女神は伝承された。祭司が詠誦したという哀歌(balag)にもドゥムジアブズ女神の記述がある。すなわち、儀式などを担う祭司たちがドゥムジアブズ女神を伝承し続けた面もある。

一方、男神のドゥムジアブズは、おそらく古バビロニア期に新たに誕生した神である。彼は、エンキ神にはこのような家族がいるはずであるという想定のもとに創作され、神名リストに組み込まれた神であると考えられる。また神名リストによると、前1千年紀には、ドゥムジ神や冥界との関連があった可能性もある。

ドゥムジアブズ神について、誕生の時期が古バビロニア期であることは、発表者の考

えるアブズのイメージの転換期に重なる。発表者はこれまで、アブズについて研究してきた。アブズはエンキ神の住処であり、エンキ神殿とも、神殿内の水盤や水槽などとも、地下の淡水層とも理解される。このうち、天地とともに、あるいは天とともに宇宙を分かち、下方領域としてのアブズのイメージは、古バビロニア期以降に形成されたものと考えられる。おそらく、ドゥムジアブズ神の名にあるアブズは、宇宙の下方としてのアブズを示しているだろう。一方、ドゥムジアブズ女神の名にあるアブズとは、より古い時代に南メソポタミアに点在した聖なる場所としてのアブズを示しているのではないだろうか。

今後は、ドゥムジ神の数ある異名とドゥムジアブズとのかかわりも調べていきたい。

## 2. シュメール語動詞における方向表現の分類

森 若葉

本発表では、シュメール語動詞の特徴をあきらかにするために、方向性にかかわる動詞について、移動物の方向および視点の違いによる整理をおこなった。

一般に、方向表現には、1) 動作・状態、2) 方向性、3) 場所・方角の要素が関与し、ある場所・方角に向かう・向ける動作、ある場所から離れる・離す動作、ある場所における方向性の欠如した動作・状態の位置表現を指すとされる。シュメール語動詞の方向表現としては、ventive「来辞」が有名であるが、本発表は、この ventive も含めたシュメール語動詞の方向表現全体を概観するものである。

発表では、移動にかかわる動詞と、移動に直接的にかかわらない動詞に分けて説明を行った。移動動詞としては、次のような動詞語基を例としてとりあげた：sa「売る・買う」、karは「追いかける・逃げる」、gen「行く・来る」、edは「出る・出す」などである。移動物の方向性によって、他言語で語彙的・形態的に区別されることが多いこれらの動作をシュメール語では1つの動詞語基であらわす。このなかで発展した機能が動詞接頭辞の ventive である。この ventive の接頭辞は一般に「動作が話者の方に向かう」ことを表すとされるが、より厳密には、移動物について共感度の高い到着点に視点をおくものであると説明できる。共感度の高い到着点とは、話者、聞き手、さらには話題の場所である。発表では、このほか、静的な方向性（時間的・空間的な隔たり）をあらわす動詞語基もとりあげた。移動動詞では、移動物にたいする視点が問題にされる。動詞にとって重要な項は移動物であり、複数語基における複数性もこの移動物に対応していることがすでにわかっている。

発表の後半では、ug「死ぬ・殺す」、zu「知る・知らせる」、gu「食べる・食べさせる」、utud「うむ・うませる」等の動詞語基をとりあげ、これらの語基が形態的区別なく日本語訳における2つの意味に使われることを示した。このことは、シュメール語が能格

的な言語であること、また動詞の態の区別が明確でないことに関わると考えられる。本発表では、これらの動詞にあらわれる項と、先に述べた移動動詞の項のふるまいとに共通性がみられることを指摘した。今後さらに分析をおこない、シュメール語の能格性についても議論を行う予定である。

### 3. シュメール語王讃歌の変遷——王と神々の「近親関係」という視点から——

大久保五月

本発表では、シュメール語王讃歌全般を考察対象とし、王と神、及び神同士の「近親関係」を明記した表現に焦点を当てて概観した。そして、内容、形式共に雑多であると言われているシュメール語王讃歌であっても、特定の視点さえ設定すれば、時代ごとの特色が顕著に見られるということを示した。今回設定した視点である『「近親関係」を明記した表現』とは、以下を指す。「父 (a-a, ad-da)」「母 (ama)」「子 (dumu)」「兄弟 (šeš)」「姉妹 (nins)」「配偶者 (nitalam, dam)」という単語に、個人名もしくは人称代名詞「私の (-mu)」「あなたの (-zu)」「彼/彼女の (-a-ni)」が付与されている表現である。このような表現は、王讃歌でしか見られないケースも多く、王讃歌の特徴のひとつとして挙げることができる。

結論として、王と神の「近親関係」および神同士の「近親関係」を明記した表現は、ウル第三王朝シュルギの時代をピークとして、徐々に減少してゆく傾向があるといえる。このことをふまえて、シュメール語王讃歌の変遷を3段階に区分した。

- ①ウル3前期：極めて多様な「近親関係」が見られる。ニンスムン女神との「母子」関係が重視されている。
- ②ウル3後期～イシン：エンリルをはじめとする大神との「父子」関係および、イナンナとの「配偶」関係を強調。
- ③ラルサ～バビロン：王と神の「近親関係」が明記されなくなる。

上記のように区分すると、①ウル3前期、特にシュルギ王讃歌の特殊性が明らかになる。シュルギ王讃歌では、ニンスムン女神と王の「母子」関係が多く表れる。そして、出自の正当性が誇示されているのみならず、「母」と「子」の親密な交流がなされていたことをうかがわせる描写も見られる。後者は他の王讃歌にはない現象である。またシュルギ王讃歌では、王と神、および神同士の「近親関係」をつないだ包括的な神統譜の意識があったようである。作品によって王の「父」たる神が変化するイシュメダガン王讃歌と比較すると、シュルギ王讃歌の「近親関係」が非常に厳密であったことがよくわかる。

このような「近親関係」の強調が、時代を経るごとに減少してゆく理由は明確にはまだわからない。神々との「近親関係」に替わって、何をもってして王を讃美していたのか検討が必要である。

#### 4. ファラにおける居留地建設とマルトゥ

堀岡 晴美

本発表では、mar-tu を「遊牧民」や「非文明人」とする従来の見方の修正を試みる。mar-tu の肩書を持つ人物の初出はファラ文書(Tell Fāra 出土)の1枚 WF 78 に記される E<sub>2</sub>-su<sub>13</sub>-aĝ<sub>2</sub> であり、つづいて初期王朝期マリ文書に Na-ni が見られる。WF 78 の中で E<sub>2</sub>-su<sub>13</sub>-aĝ<sub>2</sub> はユーフラテス河河川輸送に従事する水夫の集団に含まれるが、支給された大麦量は水夫の6倍にもなる高位の役人であった。E<sub>2</sub>-su<sub>13</sub>-aĝ<sub>2</sub> にはほかでは mar-tu の肩書がつかないため、WF 78 における職務に対してのみ mar-tu の語が用いられたと考えられる。Na-ni もユーフラテス河河川輸送に携わる人物で、ニンニザザ神殿に自身の彫像を捧げたのであるから、両者とも mar-tu に対する従来の見方とは相反する立場にあることは明らかである。

mar-tu に言及するシュメール語文学作品についても先入観を払拭して読み直す必要があるだろう。その結果、「ルーガルバンダとアンズー鳥」ではエンキ神が開墾し都市を拡張するさいに徴集される mar-tu が(The Electronic Text Corpus of Sumerian Literature: Lugalbanda and the Anzud bird, 303-304)、また「エンキ神と世界秩序」では、湾岸交易のための居留地へ交易商人らを移住させ、征服地から労働集団や家畜も移送する mar-tu の姿が浮かび上がり(ETCSL: Enki and the world order, 131-132, 248-249)、河川を利用して人員や羊の群れを舟で運ぶ仕事を mar-tu は管理していたと推測される。

WF 78 の受給者の中で最高位の人物は gal-UN (/šarru 「支配者」)とも称される鍛冶師の監督 Enlil-unkena であり、その配下には鍛冶師の神であるギビル神に属する羊飼いの集団がいる。ファラ文書が作成された前3千年紀半ばには、ハブル河中流域に出現した専門的牧畜業がユーフラテス河上流域の冶金術を伴い下流へと進出してきていた。WF 78 における大麦受給者の構成から、こういった状況の一端と、専門的牧畜業がバビロニア南部に居留地を築くために mar-tu と呼ばれる輸送管理者が協力したことが垣間見られるのである。

#### 5. シュメール初期王朝時代末ラガシュの組織と人々

田中 裕介

初期王朝時代末期のラガシュには、「王妃の家／パウ神殿」と呼ばれる組織があった。本発表はそこで働く人々について論じたものである。

従来の研究では、

1. 組織から俸禄を受けていたことが確実な人々は、割当地を支給されるか、それとも毎月大麥を支給されるかによって「割当地を取る人々」と「毎月の人々」に大別された上で、さらに詳細に検討された。一方、俸禄の受け取りが確認されない人々は扱いを保留されることが多かった。
2. 割当地を受け取るのは労働の監督官あるいは主たる労働力、毎月の大麥を受け取るのは下級労働者あるいは補助的な労働力というように、ある者が割当地を支給されるか、あるいは毎月大麥を支給されるかは、主に組織での立場の軽重で決まると考えられた。

これに対して、発表者は以下のような提案を行った。

1. 大麥の受給は確認できないものの、それ以外では「毎月の人々」と多くの特徴を共有しているように見える人々がいる。そのような人々と「毎月の人々」を合わせ、ひとまとまりに考えても良いのではないか。

いくつかの記録に現れる「中の家の使用人 (HAR.TU-e2-ša3-ga)」も、そのような人々、すなわち「毎月の人々」そのものではないかもしれないが、少なくとも「毎月の人々」の系統に属する人々と考えて良いのではないか。

2. 「中の家の使用人」は、組織でかなり重要な立場にいたように見える。となれば、支給物の違いは何によって決まったか再考する必要があるのではないか。例えば当時のラグシュに、組織とは別に一定の影響力を持っていた「町」が存在し、そして、組織内部に関わる活動を主とする者には毎月の大麥が支給される一方で、組織と「町」の間に立つような役割を期待された者には割当地が与えられた、などは考えられないだろうか。

CDLI (<http://cdli.ucla.edu/>) 収録の粘土板 Erm 08067 (未公開) を見ると、「割当地を取る人々」の一種である「王の臣民 (?) (RU-lugal)」の多くが、時には「町の長 (ugula-uru)」と呼ばれることもあったとわかる。一方、「中の家の使用人」にはそのような者は少ない (DP 137)。これらの史料の内容も、そうした可能性を示唆するものと言えないだろうか。

## 6. ギルガメシュ叙事詩に見られるアルー楽器の音 小板橋又久

アルーは、皮膜楽器、打楽器、特に太鼓と解釈される場合が多い。キルマーはアッカド語のアルーを皮膜楽器、太鼓と分類しながら、アルーとバラグは絃楽器を表す場合があると述べている。しかし、アルーは、本当に絃楽器を表す場合があるのだろうか。アルーを考える上で、ギルガメシュ叙事詩の資料をもう少し検討する必要がある。

本発表では、ギルガメシュ叙事詩に関する最近の文献学的研究をふまえ、マリ、ヒッ

タイト、エブラの音楽に関する最近の研究も参考にしながら、ギルガメシュ叙事詩に現われるアルーに焦点をあてて、アルーがどのような楽器であったかを考察する。

ギルガメシュ叙事詩第1の書板に現われるアルーは *isinnu* と結びつき、第2の書板に現われるアルーは、*akītu* と結びついている。第1の書板と第2の書板に現われるアルーは、*rašānu* という動詞と結びついている。アッカド語の動詞 *rašānu* は、天候神の声、歌手の歌声など響きわたる音を表すのに用いられている。*akītu* と *isinnu* との結びつきから、第1の書板と第2の書板に現われるアルーは、都市の住民をふくんだ都市の祝祭の中で鳴り響いた音であったと考えられる。

アッカド語の用例を調べてみると、アルーが絃楽器であることを示す積極的な資料はないように思える。アルーには、木、革、青銅が用いられ、マリ文書によると大きくて重かったと考えられる。またアルーは、雷や嵐のように激しく、轟わたるような音を出す事ができたと思われる。これまで、アルーは打楽器、特に、太鼓と考えられてきたが、その大きさ、重さ、音質から、どのような太鼓であったか。

古代メソポタミアの図像に見られる太鼓の中で、大きくて重く、雷や嵐のような轟わたる音を出す太鼓は、釜形太鼓と大太鼓であったと考えられる。釜形太鼓は、ウルク出土の楽器作りの儀式文書(O175)によると、シュメール語で *liliz*、アッカド語で *lilissu* と呼ばれた可能性が高い。大きくて重く、雷や嵐のような轟きわたる音を出すアルーは、古代メソポタミアに由来する図像に現われるような大太鼓の可能性がある。

ギルガメシュ叙事詩に見られるアルー楽器の音は、古代メソポタミアの都市の大祭や祝典の中で、都市の住民が誰でも聞くことができた轟きわたる大きな音で、前3000年紀末のメソポタミアの図像に見られるような大太鼓の音であったと推測される。

## 7. エマルにおけるズクル祭——ダガンとニヌルタの役割について——

山田 雅道

エマル出土のアッカド語祭儀文書(前13-12世紀初期)中、「ズクル (*zukurru*)」(西セム語の「記憶、記念」に関係?)という名で呼ばれるものが二つ存在する。一つは毎年第1月15日から7日間開催される祭儀 (*Emar VI 375*)、もう一つは第7年のみに同じ日程で挙行される「祭典 (EZEN)」(*Emar VI 373*)である。両者はいわば同じ「ズクル祭」の例年祭と大祭に相当するが、後者の開催に先立ってその前年には三つの予備祭儀が行われる。すなわち第1月15日(=例年祭初日)、同25日、第2月25日である。

ズクルの祭神はシリア内陸部の主神ダガン、より正確にはその分身ダガン・ベール・ブカリ「子孫(?)の主」である。大祭および例年祭の初日と最終日、また他の予備祭儀日には、彼を先頭に神々(の像)が市外聖所を訪問する。*Emar VI 373* は、神々への

供物献納の詳細の他、この訪問に伴う各種の儀礼、町への帰還の次第を描く。これらの訪問祭儀の構成内容はほぼ同様であり、その中核は市外聖所にある聖なる列柱石の間をダガンが車に乗って通り抜ける儀礼にあると考えられる。ここで興味深いのは、その通過時にダガンの顔が（布で）覆われているか否かという注記が付される点である。こうした注記は出発時と帰還時に関しても認められるが、不可解なことに日によって顔の開閉パターンは全く異なる。

上記の訪問祭儀中、神々の中でダガンの次に重要な役割を果たすのは、エマルの都市神でエマルではダガンの息子とされるニヌルタである。町への帰還に際し、彼にはダガンの車に同乗する日とそうでない日が認められ、また彼の顔も覆われる日が1日だけが存在する。これらは一体、どんな意図や規則に従っているのだろうか。

本発表では、上記2神に関わる顔の開閉と車への同乗の組み合わせパターンを、予備祭儀からズクル大祭最終日に至る流れに照らして検討した。それらのパターンは大祭の最後にクライマックスを形成するべく効果的に配置されており、その意味でダガンとニヌルタは推進装置の役割を果たしている、というのが発表者の結論である。大祭最終日、すなわち6年（発表者説）ないし7年に一度、車に同乗したダガンとニヌルタの父子が顔をあらわに町へと帰還する。彼らを迎えるエマル市民にとってそれは、自らが属する地域と都市との融和を想起・再確認する貴重な機会となったであろう。

## 8. サムス・イルナによるキシュ市の再建

川崎 康司

「四方世界の王」となったハンムラビの後継者、バビロン第一王朝第7代王サムス・イルナ（在位前1749年～1712年）の38年間に渡る治世は、一転して先代の築き上げた統合国家支配体制の動揺期と理解される。治世第8年目に起ったカッシート人の侵攻以降、支配領域であった北部と南部では大規模な叛乱が勃発、そうして、ハンムラビ（治世第33年の年名）が再興したウル市やウルク市などの伝統都市を破壊することになる（サムス・イルナ治世第11年の年名）。また、その後の治世においても、彼は先代の築いた版図と体制を完全には復元しえなかったとする見方が現在も支持されている（Stol, Mieroop, Horsnell, Charpin）。

そうした動揺期にあって、サムス・イルナはキシュ市の神殿を、次いで城壁を再建し（RIME 4.3.7.6-7）、それをそれぞれの治世年最大の業績として年名（第21年と第23年）でも顕彰する。しかも、それらの建立碑文で、彼は「バビロン市の王」に加えて「キシュ市の王」（6:5f）位獲得を前提に「四方世界の王」号（6:7f）を自任、あるいは「シュメールとアッカドの国土の全てに秩序を回復し、四方世界を彼の命令に服させた（7:116-127）」者であることを自負するのである。

2つの都市の王位に立脚して領域覇権を主張することは伝統的王権観に抵触し、また、「シュメールとアッカドの王」号を前提としない「四方世界の王」号の使用はアッカド王朝やウトゥヘガル以来のことである。そして、キシュ市再建は、これら領域王号の使用資格を実際には有さないはずであったサムス・イルナ独自の理屈（王権観）と密接な関係があったと考える。

サムス・イルナは、内乱制圧時にウル市とウルク市を破壊したという前歴（治世第10年）に、キシュ市再建（第21年と第23年）と北メソポタミア地方遠征成功（第22年）という実績を加えることにより、かつての「キシュ市の王」号の権威とアッカド王朝-サルゴン（「ウルとウルクの征服者」・キシュ市再建と「全土の王（キシュの王）」号創設）とナラム・シン（スパルトゥ地方遠征と「四方世界の王」号創設）の経歴を参考に、それを領域王号使用の根拠とした可能性が高いと報告者は推察する。また、北メソポタミア遠征以前に既に「四方世界の王」号を自任することから、キシュ市の再建事業はその間の遠征をも織り込み済みの、長期計画として予め立案されていたと見るのが最も妥当な理解と考える。

#### 9. ジムリ・リムの対シンジャール政策——クルダ王ブヌ・エシュタルとの関係を中心に——

櫻井絵美夏

現在のシンジャール山の南山麓に広がる地域は、マリ文書ではヌムハ・ヤムトバル地方と呼ばれ、この地域の主たる部族はヌムハ族、ヤムトバル族であった。ヌムハ族の代表的な王国がクルダ、ヤムトバル族の代表的王国がアンダリクであり、両者はこの地域の支配権をめぐるつねに争っていた。しかし、ジムリ・リム即位後のマリ王国にとって、この地域は拡張政策をとるエシュメンナやマリと敵対するエカラトゥムとの緩衝地帯であった。また、マリはシムアル族を主体とした部族的社会構造をもつ国で、領内にヤミン系部族との対立を抱えていたため、外交上、シムアル族対ヌムハ族・ヤムトバル族というもう一つの大きな部族対立をつくるのは好ましくなかったと思われる。そのため、マリはこの地域に対して協調政策をとり、ヌムハ族とヤムトバル族の間を仲介したりした。

しかし、ジムリ・リムは治世6年にアンダリク、ラザマと同盟し、シュバト・エンリルとマリ、アンダリクの同盟と合わせてクルダを包囲する体制をつくりあげた。従来の研究では、アンダリク、ラザマとのみ同盟するというマリのアンダリクへの「優遇」にクルダが不信感をつのらせ、マリはクルダを敵に回してしまったのだとされていた。しかし、ジムリ・リム治世6年、クルダでブヌ・エシュタルに代わって、新王ハンムラビが即位したとき、ジムリ・リムは再度クルダとアンダリク間を仲介しようとしていた。

ゆえに、マリは従来の協調政策を捨ててはならず、マリがアンダリク、ラザマと同盟するに至った原因はクルダの方であったのではないかと思われる。

クルダが勢力を拡大しようとする傾向は、初代シマフ・イラネ時代からであり、2代目のブヌ・エシュタル時代のイダマラツ地方にまでおよぶ勢力拡大は、エシュモンナの撤退によりクルダがマリの政策に従う必要がなくなったからだと思われる。そのためマリはクルダを押えるため、アンダリク、ラザマとの同盟に至ったのではないかと考えられる。

## 10. 『ギルガメシュ叙事詩』における神々の役割とその変化

依田 泉

『ギルガメシュ叙事詩』アッカド語標準版の成立の過程では、宗教についてどれだけ統一が図られたのであろうか。その解明のために主な神々が叙述の中で果たしている役割を検討する。ここでは、Anu, Enlil, Ea, Shamash という四神に注目した。いずれも、メソポタミア宗教の中核を担っているが、『ギルガメシュ叙事詩』が、これらの神々に明確な機能分担をさせているか、あるいは、それらの間にあえて独自の序列を設けているかといったことが問題となる。

本叙事詩は、12の書板 (tablets) から構成されるが、四神はそれぞれ特定の書板に偏って言及される。Anu は、第1書板の「エンキドゥの登場」の場面と第6の「天牛の派遣」で、また、Enlil と Ea は第11の「洪水」と第12の「エンキドゥの冥界下り」でそれぞれ目立って登場する。その際 Enlil と Ea は対照的な働きをする。すなわち、Enlil が主人公たちに救いの手を伸ばそうとしないのに対し、Ea はギルガメシュやウトナピシュティムを助ける側に回る。そして、Shamash の主な叙述は、「フンババとの戦い」とそこに至る旅路、また、「エンキドゥの死」とそれに続く葬儀、さらには「不死を求める旅」に見出される。

他方で、これらの神々は、自らが際立つ箇所以外では、出現が極めて限定されるか皆無となる。例えば Anu は、「洪水」の書板で最初の段階に控えめに描写されるのみであり、「フンババとの戦い」には一切記述がない。ならば Enlil が代わって全体を通して優位になるかいうとそういうわけでもない。つまり、Enlil も、第11・12書板以外では一・二度出て来るか、全く触れられないかである。Ea の場合はさらに極端であり、同じく二書板を除くとほとんどどこにも現れない。Shamash も、ギルガメシュやエンキドゥの旅に関わるほかは、「洪水」の記述で「ときを定める」神として指摘される程度である。

以上のように、『ギルガメシュ叙事詩』アッカド語標準版では、ある神を一貫して優越させようとした痕跡がない。むしろ、元になる作品で中心となった神の立場がそのま

ま導入されているように思われる。したがって、神々の関係を調整するための編集が加えられる、ということがほとんどなかったのではないだろうか。

## 11. テル・タバンの出土養子縁組文書

山田 重郎

シリア北東部、ハブル川中流域に位置するテル・タバンの遺跡では、1997年から国士舘大学による発掘調査が行われ、前2千年紀における上部メソポタミアの歴史と文化の解明に寄与する多くの考古学的データがもたらされてきた。特に中断をはさんで2005年に再開され現在まで継続されてきた発掘調査（代表：沼本宏俊）では、中アッシリア時代（前13～11世紀）と古バビロニア時代（前18世紀）に由来する多くの楔形文字資料が出土した。本報告は、2009年の調査において出土した、これら2つの時代の間の空白を補う新史料について報告する。

新史料は、新アッシリア時代層の埋土から発見された粘土板文書断片（縦5.1、横7.1、最大幅3.2cm）で、本来縦長の粘土板の下部半分ほどにあたる。粘土板の形状、捺印方法、字体、文書の形式から文書は前16～15世紀頃に年代づけられ、男児の養子縁組を記録し、養父母あるいは養子がこれを不法に破棄する場合の罰則、ならびに家産相続についての定めを記している。

養子縁組文書は、前18世紀後半から前11世紀初頭までの期間ユーフラテス川中流域ならびにハブル川下流域で作成された「ハナ文書」と呼ばれる一連の文書に特徴的な表現を含んでいる。2006年にテル・タバンの遺跡で発見されたテルカ市（現テル・アシャラ）の王イツィ・スムアビがタバトゥム市（現テル・タバンの）のヤスィム・マハルに対して発行した前18世紀後半に由来する不動産下賜文書も同様の「ハナ文書」の特徴を持っており、2009年出土の養子縁組文書は、テル・タバンの遺跡で発見された2点目の「ハナ文書」になる。このことは、タバトゥム市が長期にわたり「ハナ文書」の書記伝統を維持したことを示唆する。養子縁組文書には「ハナの地の王」アフニの印影が残っており、当該期にタバトゥムがテルカ地域を拠点とする王権の政治的・行政的影響下にあったことを示す。

印影にある王名アフニは、中期ハナ時代（前16～15世紀）の「ハナの地の王」ハンムラピの父として、テルカで出土した文書にも知られている。中期ハナ時代の「ハナの地」の王統については、未だ不明な点も少なくないが、アフニは、イディン・カッカ、イシャル・リム、イギド・リム、イスィフ・ダガンの4人に次ぐ王の一人であり、中期ハナ時代後半に在位していたことは確実である。

## 12. 前7世紀のアッシリアにおける『マルドック予言』の受容

杉江 拓磨

マルドック神によるヒッタイト、アッシリア、エラム訪問とそれら滞在先からバビロ

ンへの帰還を語る『マルドゥク予言』は、イシン第2王朝のネブカドネツアル1世（在位前1125-04）がエラムからマルドゥク像を奪い返したことを称揚するために著された事後予言の書であると考えられる。しかし、『マルドゥク予言』の現存する写本3部はいずれも前7世紀のアッシリアで書き写されたものである。本発表では、バビロニアのネブカドネツアル1世を讃える『マルドゥク予言』がなぜ王の死後400年以上を経たアッシリアで読まれたのか、その理由を考察する。

前7世紀のアッシリアで『マルドゥク予言』が読まれた背景として、前689年にセンナケリブがマルドゥク像をアッシュルへ持ち去った出来事を見逃すことはできない。このマルドゥク神の「捕囚」を受け、アッシリアではマルドゥクとアッシュル神との関係を説明しようと、さまざまな見方が試みられた。そうした試みは例えば、主人公であるマルドゥクの名前を「アンシャル」と綴られたアッシュル神のものに書き換える『エヌマ・エリシュ』の写本や、アッシュルとマルドゥクを父子として表現するエサルハドンの碑文にかいま見ることができる。

『マルドゥク予言』の写本の1つは、アッシュル市にあるアッシュル神殿に仕える呪術師の家の跡から見付かった。そこで発見された粘土板文書については、O. ペデルセン Pedersén により目録が作られており、この家でどのような文書が読まれていたか知ることができる。目録には、『マルドゥク予言』本来の本题であったとされるネブカドネツアル1世のエラム遠征に関する文書は含まれていない。他方で、『マルドゥクの神明裁判』のようにマルドゥクに対するアッシュルの優位を主張する祭儀注釈書などが見られる。このことは、家の主人である呪術師がネブカドネツアルの凱旋にほとんど注意を向けておらず、むしろ、センナケリブのバビロン征服後にアッシリアで展開されたマルドゥクとアッシュルとの関係をめぐる議論に関心を払っていたことを物語る。このように蔵書から浮かび上がる所有者の関心から、『マルドゥク予言』は7世紀半ばのアッシリアにおいて、著者が意図したネブカドネツアルの賞賛のためでなく、マルドゥク神の位置付けを探る思索とのかかわりで読まれたものと考えられる。

#### 第4会場

##### 1. ジュナイドにおける「原初の契約」とその意味 澤井 真

初期スーフイズムを代表する一人であるジュナイド (d. 910) の論稿の中には、クラーンにおいて「原初の契約」(Q7: 172) として知られる節に基づいた神秘的理論がある。ジュナイドはこの節に基づく議論を通して、契約が結ばれる以前には神と人間が一体であったことを強調している。その際、神がアダムから現世で存在する以前の人間を取り出して、契約を結ぶまでのあいだは、「無始の永遠」(azal) という語で表現される。

彼はこの状況を、消滅を意味する「ファナー」(fanā')の語と、存続を意味する「バカー」(baqā')の語で表現している。すなわち、「ファナー」の語は人間が存在しない状態を示すための語であり、「バカー」の語はこの永遠性が継続する状態を示すための語である。これらの語によって、彼は「原初の契約」の状況における神と人間の一体性を論じると同時に、現世での神と人間の合一を論じている。彼にとって、現世で神と合一することは、この「無始の永遠」における神と存在以前の人間の未分離の状態へ回帰することに他ならない。

また、ジュナイドはスーフィーの目指すべき神的合一という理想の状態を示すために、タウヒードの四つの段階を提示した。神の唯一性を示す礼拝や告白などの信仰行為によるタウヒード、外面的な知を持つ者のタウヒードが論じられた後に、「選良」によるタウヒードが論じられる。この者たちは前段階の外面的な知に加えて、内面的な知を併せ持ち、神的合一としてのタウヒードへ到ることができる者たちである。彼らは「原初の契約」が結ばれる以前の状態、すなわち神と一体の状態へ戻ることを目指している。このことは「存在する以前の状態」という言葉で表現されている。

このような彼の議論を、「第一の分離」と「第二の分離」というスーフィズムの専門用語から考察するとき、「第一の分離」として捉えられる状態とは、神と人間が「原初の契約」を結ぶことによって生じる分離である。その後、一部の人は、現世において神との合一によって消滅し、神の中に存続しながら再び分離する。この状態は、神と人間のあいだの断絶という「第一の分離」から合一の状態へ到り、再び神と分離するという「第二の分離」として理解できる。「原初の契約」を用いて展開される彼の議論は、彼の神秘的理論の中核を成していると言えよう。

## 2. ジャーミーの『閃光の輝き (Ashī“at al-Lama‘ūt)』における下降と上昇の関係

宋 暎恩

ジャーミー (Nūr al-Dīn ‘Abd al-Raḥmān ibn Aḥmad Jāmī, d. 1492) の『閃光の輝き』はイラーキー (Fakhr al-Dīn ‘Irāqī, d. 1289) の『閃光 (Lama‘ūt)』に対する最もよく知られた注釈書で、『閃光』の普及に大きい役割を果たしており、中国でイスラム教義の教科書として使われた程、その影響範囲も広い。『閃光』は、有名なスーフィー詩人であるイラーキーが、クーナウィー (Ṣadr al-Dīn Qūnawī, d. 1274) から『叡智の台座 (Fuṣūṣ al-Ḥikam)』講義を聞いたことをきっかけに存在一性論を自ら述べた書物である。

注釈に当たって、ジャーミーはイラーキーの文学的比喩や存在一性論用語を存在一性論の全体構造の中に位置付けている。特に神を比喩する「愛 (‘ishq)」が『閃光』の中心概念となっており、この注釈は神学的論争や宇宙論ではなく、「愛するもの (‘āshiq)」

つまり修行者の観点から記述されている。ジャーミーは神に向かっていく修行者の上昇過程を、神から多の世界へ下降する顕現との関係から考察し、修行の状態の特徴を明らかにしている。

ジャーミーは神に向かう方法において、神による誘引 (judhbah) よりも、段階を一つずつ昇っていく旅 (sulūk) を強調しており、修行の過程を重視していると考えられる。例えば、修行者が神へ上昇する過程における目撃的顕現 (tajallī shuhūdī) の特徴は、存在的顕現 (tajallī wujūdī) によって多の世界に存在者が下降する過程を遡る中で理解される。この両顕現は葡萄酒とグラスを用いたイラーキーの比喩を注釈することによって説明される。

神から顕現して、再び修行者が昇っていく段階とは、言い換えると神の属性の顕現ともいえる。ジャーミーは、恵みの顕現 (tajallī luṭfī) から威圧の顕現 (tajallī qahrī) を取り払うというイラーキーの表現から、修行者はより有益なものが顕れる神名の方に移っていくべきであると説明する。よって修行者の上昇とは、下降した神の神名・属性を遡るものであるということが分かる。

この修行過程を、ジャーミーは四つの段階に分類するが、特に第三と、第四の修行段階は、両方とも義務外行為の近接 (qurb nawāfil) と義務行為の近接 (qurb farā'id) を統合する状態を有しており、その認識的特徴も類似している。しかし第三と第四の段階は存在一性論の構造から見ると、それぞれ第二の個別化と第一の個別化を意味しており、神の絶対唯一性は闕入されない。以上から修行過程が存在一性論的理論の中に位置づけられるといえる。

### 3. 『プラトンの知的諸形象』に見る形象論の諸相——ファナーリーによる絶対存在の存在証明との関連をめぐって——

中西 悠喜

シャムスッディーン・ファナーリー (1431年没) は、タフターザーニー (1389/90年没) に代表される存在一性論批判に対して、存在一性論側から反駁を加えたオスマン朝初期の学者である。タフターザーニーによれば、絶対無限定の存在 (以下、絶対存在) とは、外界に実現をもたない普遍概念である。しかし存在一性論者はこれを神 (al-ḥaqq) と同定し、全宇宙をその自己顕現として把握する。そのためファナーリーは、神がそれ自体において必然的に存在する以上、絶対存在もまた存在者であるとしなければならなかった。こうした絶対存在の存在証明において彼が具体的に依拠していると思われるのが、本発表で焦点を当てた「プラトンの形象」(以下、形象) をめぐる議論である。とはいえ、形象に対するファナーリーの言及は、極めて断片的なものでしかない。本発表では、彼の議論のソースであった可能性が指摘されている『プラトンの知的諸

形象』(13世紀後半から15世紀初頭に成立)と呼ばれる著者不詳の論考を取り上げ、両者の議論の間に見られるテキスト上のパラレルを指摘することによって、ファナーリーが絶対存在の存在証明において「形象」に言及する論理を探った。

手がかりとなるのは、次の2点。①ファナーリーの採る形象論が『プラトンの知的諸形象』第1章第2探求中で紹介されている学説1(=「数学的なものと自然学的なもののおいづれにおいても形象は存在する」)のそれに対応するという点。②彼が絶対存在を「種」とする説に対して一定のシンパシーを抱いていたという点。これら2点に基づけば、彼の議論に現れる絶対存在と形象の関係は、学説1が想定する種と形象の関係へと還元されることになる。そして学説1の形象論によれば、種(=無条件的に捉えられた本質)は、实在レベルでは形象(=普遍者)と相等しいものとなる。ここから形象が外界に存在するとすれば、種である絶対存在もまた外界に、質料的個物どもから離れて存在し得るという結論が帰結する。これが絶対存在の存在証明において、ファナーリーが形象に言及する理由であると考えられる。以上が本発表で示した暫定的な結論である。  
\*本研究は科学研究費補助金21・9911による研究成果の一部である。

#### 4. 医学の注釈文献——イブン・アビー・サーディクの著作を例に——

矢口 直英

中世イスラム医学の研究や文献の校訂は医学史上に名を残す数点为中心であり、それら著名なタイトル以外は未だ研究の対象となっていない。なかでもギリシア語の著作およびアラビア語の著作への注釈書は多数存在し、一つのジャンルを形成しているにもかかわらず、注目されているものは非常に少ない。独自の著作と比べて注釈書はオリジナリティの点で劣ると思われるがちだが、重要な記述が眠っていることもある。13世紀のイブン・ナフィース(1288年没)がウィリアム・ハーヴェイの発表(1628年)より早く血液の肺循環を指摘したことは有名だが、この記述はイブン・シーナーの『医学典範』に対する彼の注釈書にある。中世の医学の教師は権威ある文献を用い、弟子に向けて解説しながら教授していたので、注釈はそれ自体が学習用テキストであったといえる。ゆえに注釈書には、まず注釈者による解釈の反映が、さらにはその時代に注釈対象となった文献がいかに受容されていたのかを読み取ることができる。注釈書は医学思想の研究対象としての価値が十分にある。

重要な注釈書のひとつとして、11世紀のイブン・アビー・サーディクによる『フナイン「医学問答集」注釈』がある。これはフナイン・ブン・イスハーク(873年没)の『医学問答集』に対する注釈書である。人間の精神機能に関する医学理論の展開を見ると、この機能はフナインの時代には想像力、思考力、記憶力の3つに分類されていた。

11世紀の注釈書ではこれら3つに共通感覚と評価力が加えられて、合計で5つの能力が脳にあるとされる。しかし、想像力や表象力や判断力と訳せる単語がそれぞれ混同されているようで、明確に区別できていない。また、一部の記述では5つの能力が合わせて扱う箇所がある一方、脳内の能力の配置に関する箇所では新しい2つが言及されていない。こうした記述の揺れは、注釈書として原文にある精神機能の3区分を維持したまま、5区分の新しい説を採用するためであったのかもしれない。

このように、医学文献の一つのジャンルとして存在する注釈文献は情報源として十分な価値をもっている。しかも医学書の一つとして扱えるのみならず、注釈書の性質上、古い時代の思想との関連性を見出すこともできるのである。今後、研究対象としての注釈文献の利用には大きな可能性がある。

#### 5. 通史史料におけるハッジヤージュの人物像について——『歴史』と『征服』における分析から——

松本 隆志

本発表では、初期イスラーム史料群の通史史料であるタバリーの『歴史』とイブン・アッサムの『征服』において、ウマイヤ朝イラク総督ハッジヤージュを取り上げ、特に5代カリフ・アブドゥルマリクとの関係性に注目し、その描かれ方について分析をおこなった。

まず、発表者の問題意識として、初期イスラーム史料群を個別の歴史研究例として把握する視点の必要性を示した。そのうえで、ウマイヤ朝中期に関する歴史叙述の多くを占めるイラク総督ハッジヤージュについて、両史料間での比較分析をおこなった。

その結果、(1) カリフ・アブドゥルマリクとハッジヤージュの関係、および(2) ハッジヤージュの管轄領域について、史料間で叙述に相違が見出された。(1)については、『歴史』ではハッジヤージュはカリフの意志に従順な存在であるのに対し、『征服』におけるハッジヤージュはカリフの意をうかがうことなく自律的に活動する存在として叙述されていた。(2)については、スィジスターン・ホラーサーン両地方の管轄が、『歴史』ではイラク総督任命後に追加されているのに対し、『征服』ではイラク総督任命当初から与えられていたものとして叙述されていた。

(1)の相違から、両史料間に政治上の認識の相違が想定される。また(2)の相違からは、イラク総督職に注目した場合には制度史上の相違が、そしてハッジヤージュ個人の経歴に注目した場合には人物史上の認識の相違が、それぞれ想定される。『歴史』と『征服』を分析していく上で、以上の三つの歴史認識の文脈に注目する必要があることを指摘した。

加えて、従来のウマイヤ朝史研究においては『歴史』の叙述情報を高く評価するあま

り、ウマイヤ朝史理解の少なからぬ部分を『歴史』に内在する歴史認識に依拠している点を指摘した。

## 6. 『王冠の書』に見るアドッド・アッダウラの王統観

橋爪 烈

本報告では、アブー・イスハーク・イブラーヒーム・サービー（384H/994年没）の著作とされる『王冠の書』（現存せず）の、その抜粋版（一部現存）に示された内容を吟味し、そこからブワイフ朝最盛期の支配者アドッド・アッダウラのブワイフ朝王統観を読み取るとともに、『王冠の書』執筆の背景に当時の政治状況が深く影響していることの解明を試みた。

まず『王冠の書』の概要を、先行研究や現存する抜粋版のテキストから提示した。その上で、同書執筆の背景とその時期を考察し、そこにはアドッド・アッダウラの意向が強く働いていたこと、その時期は、アドッド・アッダウラの東方遠征の期間と重なることを明らかにした

次に『王冠の書』執筆当時、アドッド・アッダウラが直面していた政治状況を検討し、それが同書の内容に大きく影響を与えていることを明らかにした。当時、アドッド・アッダウラは弟ファフル・アッダウラ及ズィヤール朝君主カーブース追討のために東方への遠征軍を派遣しており、ズィヤール朝とその支持者たちに対する自らの支配権及び王統の正当性・正統性主張の必要に迫られていたのである。

最後に、抜粋版テキスト及び『王冠の書』の内容を引用している後世の諸史料から、ダイラムとジールの2民族の王統・血統の情報を再構成し、それらの血統がブワイフ一族とどのように関わっているのかを示した。加えて、抜粋版に示されたブワイフ朝とズィヤール朝との、ジール王の取り込みを巡る争いと、最終的にブワイフ朝側がその争い勝利したという内容についても触れ、この内容の提示こそが、アドッド・アッダウラの対ファフル・アッダウラ及びカーブース戦役における自身の正当性及び正統性の主張の最たるものであることを示した。

以上の考察から明らかになることは、『王冠の書』の執筆はアドッド・アッダウラの影響が強く働き、むしろアドッド・アッダウラ監修というべき書物であること、アドッド・アッダウラの王統観はダイラムとジールの有力家系の結節点であるという主張に彩られ、彼は自らをダイラム・ジール双方の血を受け継ぐ人物として示そうとしていたこと、そして、当時カーブース及びファフル・アッダウラ追討のために東方に遠征軍を派遣していたアドッド・アッダウラが、自軍および東方諸地域のダイラム・ジール系諸侯に対して自らの正当性と正統性を主張し、その支持を獲得しようとしていたこと、である。

## 7. 8世紀中葉バスラにおける海寇とインド西北部情勢

亀谷 学

ヒジュラ暦240年頃（西暦854-855年）に死亡したバスラの伝承学者ハリーフ・ブン・ハイヤートの『年代記』には、ヒジュラ暦149年（766-767年）から153年（770）にかけて、「ミード」と呼ばれる一団がイラク南方に位置するバスラ領域を海から襲撃したとの記述がある。本報告では、この記述を起点として、年代記や征服記、地理書などからこのミードに関する情報を拾い集め、彼らがどのような人々であるかを確認した上で、このミードによるバスラの襲撃という出来事が、アッバース朝初期という歴史的文脈の中でどのような意味をもつ出来事であるかを検証した。

年代記や征服記、地理書の情報からは、ミードは、①インド西北部のインダス川周辺およびインド西岸のカティヤワル半島において勢力を持っていたこと、②ウマイヤ朝期には主にインダス川周辺においてアラブ・イスラーム勢力と戦っていたが、アッバース朝初期には逆に海路を用いてアラブ・イスラーム勢力の領域であるバスラへと攻め込んでいたこと、が明らかになった。

また、ミードという名では語られていないが、①ヒジュラ暦151年（768-769年）という同様の時期に、アラビア半島西岸のジッダに対する海からの襲撃があったこと、②アッバース朝カリフ・マンスールが、それに対抗するためにインド方面へと向かう海軍を準備させていること、③マンスールの死後、カリフ位を継いだマフディーが実際にインド方面へ軍を送っていること、がいくつかの年代記の記述に見られる。

一方、タバリーの年代記によると、ヒジュラ暦145年（762-763年）にバスラとアラビア半島西部で起きた、ムハンマド・ブン・アブド・アッラーフを中心とするシーア派勢力の反乱がインド方面にも波及し、総督人事に影響したほか、インドの非ムスリム地域の王国で匿われていた反乱首謀者の子と孫の追捕を、マンスールが新任総督に要求するに至ったという。インド方面からのバスラやアラビア半島西部への襲撃はこのような背景のもとで行われたのである。

すなわち、アッバース朝初期、ヒジュラ暦150年前後に行われた、インド西岸からバスラへの襲撃は、アッバース朝初期の騒乱が、アラブ・イスラーム世界の境域であるインド領域にまで波及し、インド領域の側からも積極的な関与が存在したことを示すものであると考えられる。

## 8. アラブのインド洋航海における島の役割

栗山 保之

今次報告では、この二人の航海技術者の手による航海技術書のうち、イブン・マージドの航海技術書よりもより実用的な記述がなされていると筆者がみなしている、スライマン・アルマフリーの航海技術書二篇をとりあげた。それは、『航海科学の精密なる

知識におけるマフラの支柱（『*Umdat al-Mahrīya fī Ḍabṭ al-ʿIlm al-Baḥrīya*』）と『海洋の知識に関する優良なる指針（*Minhāj al-Fākhīr fī ʿIlm al-Baḥr al-Zākhīr*）』である。

本報告では、前近代のアラブのインド洋航海を考察するために、アラブのインド洋航海技術書にみえるインド洋に点在する島々の記述の分析を主たる目的とした。

今日、現存するインド洋の航海技術書は、古来よりインド洋を活発に往還していた数多のアラブ人船乗りたちによって培われてきた航海技術を継承する、二人のアラブ人航海技術者（mu'allim）、イブン・マージド Ibn Mājid とスライマーン・アルマフリー Sulaymān al-Mahrī によって著されたものである。15世紀末から16世紀初頭にかけて活躍したこの二人の航海技術者はそれぞれアラビア語で、自身の卓越した航海技術と豊富な経験をもとに、インド洋の航海技術についていくつかの著作を残している。

インド洋に所在する島を分析対象とするのは、上記二篇の技術書がいずれも、島にかかわる章を設け、その記述には多くの頁が割かれており、アラブのインド洋航海における島の役割の重要性を示しているのではないかと考えたからである。

分析方法としては、地理書や旅行記、あるいは驚異譚などにみえる島の記述をとりあげ、それらの記述内容と、インド洋航海技術書の島の記述を比較検討し、アラブのインド洋航海における島の役割を考察した。

この考察の結果、島および島の岬の位置を示す緯度が数値（北極星やこぐま座の高度）で表されていたこと、そしてそれらが大洋を航行する船の船位を確認する上で重要な指標となっていたことを指摘した。また島や島の岬の緯度は同時に、インド洋におけるアラブの航海圏を示し、したがってポルトガルのインド洋来航期前後のアラブの航海圏が、西はマダガスカル島から東はマレー半島西岸までであったことを示した。

## 9. 「商人王」サイード・サイード——19世紀初葉のブー・サイード朝政権——

片倉 鎮郎

サイード・ビン・スルターン（サイード・サイード）治世期（1806-56年）のブー・サイード朝は、活発な対外拡張に注目する立場からは強力な政権として、領域支配の不安定さ、イギリスへの従属性を強調する立場からは弱体な政権として描かれてきた。これに対し本報告は、主としてイギリス東インド会社（以下 EIC）文書に現れる従来扱われてこなかった事例を用いて、サイード治世前半にあたる19世紀初葉（1806-1830年頃）におけるブー・サイード朝政権のあり方を再考した。

18世紀末以降のブー・サイード朝君主はイバード派イマーム位に就かなかったため、同派教義上は超部族的支配者としての正統性をもたなかった。従って、これ以降、同朝の権威・権力が及ぶ範囲は、その時々の実力に応じて伸縮した。実際、治世初期にお

るサイドの勢力範囲はほぼマスカト周辺に限られ、自ら参画する貿易に活路を見出すことになる。他方、同朝君主は1798年から19世紀初葉まで欧米諸国（とりわけイギリス）とさまざまな条約・協定を結び、オマーンの主権を有する君主として承認されていた。

商業活動の中で生じた彼と英臣民との間の債務紛争に対し、またサイドによるスペイン領フィリピン総督宛紹介状の発給要請に対し、EIC 政府がとった姿勢からは、彼がイギリスに「友好国」の「君主」として承認されることで商業上の便益を得ていたことが確認できる。他方、モンバサの領有権をめぐる彼の英国王宛書簡の内容からは、オマーンの主権者として自らを位置づけることで英国から政治的利益を引き出そうとするサイド自身の姿勢も窺える。

さらに、商業・軍事に用いられ、政権の権力基盤となっていた艦隊に注目すると、保有する洋式帆船の多くは英領インドの建造であり、艦隊整備の過程では EIC 政府によるさまざまな支援・協力があつた。これもまたサイドがイギリスに友好的な外国君主と認められていたことで可能になったと言える。しかしそれゆえにこそ、艦隊を用いた軍事行動にはイギリスの意を迎えざるを得なかったことも見逃せない。

以上本報告での検討から明らかになったのは、「商人」であることと「王」であることが分かちがたく結びついた「商人王」としてのサイドの姿であり、また19世紀初葉のブー・サイド朝が、強くないし弱体な政権という評価を一意に定めえない二面性をもっていたことである。

#### 10. イル＝ハン朝下イランにおけるオルトクとその交易活動

四日市康博

「オルトク」とはモンゴル帝国の王族や重臣から資本を付与され、その運営に携わった者をいう。ペルシア語史料では *ürtāq*、漢語史料では「斡脱」と表記されるが、元来「パートナー」や「親友」を意味するトルコ語の *ortuq* が語原であり、古い事例としてはムスリム商人とトルコ系遊牧民グズ族の提携関係において *ṣadiq*（友）と呼ばれたという Ibn Faḍlān の報告がある。基本的にオルトクは商人と遊牧民のパトロンクライアント契約であり、主要なオルトクの多くは遠隔地交易に従事する商人であった。

元朝、モンゴル帝国下のオルトクに関しては一定の先行研究があるが、現在のところ、イル＝ハン朝下のオルトクに関する研究は皆無である。*Jāmi' al-Tawārikh* や *Tārikh-i Waṣṣāf* などを繙くと、占領直後のバグダードのオルトク、ヤズドとタブリーズを往来していたアター＝ベクのオルトク、ケルマーンを拠点としていたオルトク、キーシュ王家を中心としてインド洋交易で活躍したオルトク、ジュチ朝とイル＝ハン朝の南北交易に従事した両王家のオルトクなどの事例を見つけることができる。

*Jāmi' al-Tawārikh* によれば、オルトクへの資金貸与に関わった者たちには、(A)旧来

から宮廷に出入りしていたオルトク、(B)自己資本を持たずに新たにオルトクとなった者たち、(C)オルトクたちから借財したユダヤ・ムスリムたち、の3類があった。このうち、いわゆるオルトク商人と呼びうるのは(A)(B)であり、モンゴル宮廷からの資金によってより大規模な交易をおこなって財をなした。彼らのパトロンはモンゴルの王族・アミールたちであった。イル＝ハン朝のオルトク政策の転換はバラート制(手形制度)の施行と深い関係にある。特にアルゲン期の宮廷財政改革により、オルトクと宮廷の間にディーワーンが介入することになり、オルトク制における遊牧民と商人の関係に変化が生じることとなった。

今後、アルダビール文書群のオルトク関連文書の解析やラスール朝の公文書集 *Nūr al-Ma'rif fī Nuẓūm wa Qawānīn wa A'rāf al-Yaman fī al-'Ahd al-Muẓaffarī al-Wārif* に見えるキーシュ商人のペルシャ湾ーインドー紅海間の多角的貿易活動の考察を通じてオルトクと宮廷・ディーワーンの関係をより具体的に把握する必要がある。

#### 11. ラシード・ウッディーン『ガザン史』挿画入り写本について——タシュケント写本 (Bīrūnī 1620) を中心に—— 白岩 一彦

ラシード・ウッディーンが編纂した *Jāmi' al-tavārikh* の挿画入り写本については、その第2巻世界史の部の写本がエジンバラ、ロンドン、イスタンブルにあり、Basil Gray や Sheila S. Blair などの研究者によって詳細な研究がなされてきた。

しかしその第1巻 *Tārīkhī Mubārakī Ghāzānī* (ガザンの祝福されたる歴史、ガザン史) の挿画入り写本については、本文の方は校訂テキスト作成などで用いられているものの、挿画を含めた、挿画入り本としての検討はこれまでほとんどなされてきていない。

そこで、今回の発表では、第1巻の挿画入り本系統の写本としてウズベキスタンにあるタシュケント写本を取り上げ、検討してみることにした。

タシュケントのウズベキスタン東方学研究所所蔵の『ガザン史』写本 (Bīrūnī 1620) には、挿画用スペースが多数あるものの、実際に挿絵が入っているのは7箇所、具体的には次の通りである。

1. ドブン・バヤンと妃の図
2. バルタン・バハドルと妃の図
3. チノス族釜ゆでの図(下書きのみ)
4. チンギス・ハン即位の図(下書きのみ)
5. ウゲデイ・カーンと妃の図
6. クビライ・カーンと妃の図
7. フラグ・ハーンと妃の図

これらのうち、本文の書写が終わり、絵を入れる段階になって実際に入れられた絵は5, 6, 7及び3の下書きの計4点で、それらの絵が入れられた年代は本文書写のすぐ

後であろう。本文書写の年代は、イスタンブル写本（1317年11月書写）との比較により、イスタンブル写本に先行する1307年から1317年の間のいずれかの年で、従って、上記4点の絵も、遅くとも1317年ないし1318年までには入れられ、そこで挿画作成が中断したと思われる。

## 12. 15世紀ペルシア細密画における“Turkman Style”の成立過程をめぐって——様式の起原と初期発展——

林 則仁

ペルシア細密画の分類における Turkman Style（トゥルクマーン様式）とは主に15世紀中頃から16世紀初めにかけて、カラコユンル朝・アクコユンル朝統治下のシーラーズやタブリーズで制作された細密画にみられる特定の様式を指す。この様式の使用は今から60年ほど前にイギリスのバジル・ロビンソンによって初めて指摘され、その後、ロビンソン自身の研究によって一般的に認識されるようになった。しかしながら、ロビンソンによる研究はいずれも概略的なものに過ぎず、現在までトゥルクマーン様式への深い理解は得られていない。そこで、発表者はトゥルクマーン様式と分類された細密画の情報を可能な限り収集して、より詳しい分析を試みてきた。今回は、ロビンソンによる「Turkman Style の起原」の議論の検証と、様式の初期発展について研究発表を行った。

様式の起原についてロビンソンは、15世紀初めのタブリーズ周辺の可能性を強く主張しているが、その根拠となっているのが1419年製の写本に挿入されている細密画である。ここには、トゥルクマーン様式の特徴を持った人物像の最も初期の例を確認することができるが、顔の描き方は14世紀後半ジャラーイル朝のタブリーズ様式とよく似ており、ロビンソンはこの細密画がカラコユンル朝タブリーズの画家の作品と考えた。しかし、ジャラーイル朝の様式は15世紀前半のあらゆる地域の細密画に影響を与えており、さらに1410年代から1460年代にかけてタブリーズで制作された細密画がいまだ確認されていないことから、ジャラーイル朝の特徴のみをもってタブリーズと結び付けることはできない。これに対して発表者は、細密画だけでなく写本自体の検証をもとにヤズドで制作された可能性を指摘した。また、ロビンソンはタブリーズで発展したトゥルクマーン様式は1452年のカラコユンル朝の侵攻をきっかけにシーラーズへもたらされたと考えたが、ケンブリッジ大学図書館所蔵の「シャー・ナーメ」（1437年）をはじめ、トゥルクマーン様式の特徴を持った細密画がそれ以前に既にシーラーズ・ヤズド周辺で制作されていることから、発表者は様式の起原と初期発展はともにシーラーズ・ヤズド周辺地域である可能性のほうが、タブリーズである可能性よりも大きいと結論づけた。また、様式の初期発展には同時代のヘラート派の作品との明確な関係がコンポジションに限って確認できることなどを指摘した。

## 第5会場

### 1. 文化遺産の保護と破壊を分けるものは何か？——トルコにおける古美術品の不法取引問題を事例に——

田中 英資

トルコでは近年、盗掘によるトルコ国内の考古学遺跡の被害、並びにそれによる発掘品の国外流失が考古学者やジャーナリストから報告され、深刻な問題として受け止められている。またトルコ政府は、国内に発見されるすべての文化遺産は国家財産であるとの立場から、法的手段も含め、違法な手段により国外に流出した文化遺産の返還を求めている。本発表では、新聞報道やインタビューの分析を通して、トルコにおける盗掘と密輸による文化遺産の国外流出を問題視し、文化遺産の「保護」を主張する議論を分析した。特に、「(考古学的美術品が)発見された場所としてのトルコ」という観点が、こうした主張にどのような組み込まれているのかを考察した。

トルコにおける文化遺産保護と考古学的美術品の取引に関する法制では、この国で発見される「文化遺産」はすべて、常にトルコ国内で「管理」「保護」されねばならないという原則がある。これに基づいた厳しい政府の取り締まりが行われている一方で、トルコのメディアでは、盗掘と密輸による考古学的遺産の国外流出問題がしばしば報道される。新聞報道や考古学者へのインタビューなどの分析を通して、トルコにおける文化遺産の「保護」の主張がどのようになされているのか、トルコ人考古学者、不法取引に関与したトルコ人美術商、政府の許可を受けた合法的トルコ人収集家、欧米人収集家に分けて検討した。

トルコ人考古学者、トルコ人だけでなく欧米人の個人収集家など、こうした議論に登場してくる人々の主張の分析を通して明らかになったのは、それぞれの主張は多様であるが、そのいずれの立場も、自らのアプローチが「文化遺産」の「保護」であることが前提になっている点である。特に、トルコ側の主張では文化遺産の発見された場所としてのトルコという、仕切られた境界の内部にあることが、文化遺産の「保護」とみなされる。また、それは単に物理的な「場所」ではなく、「発見された場所」として、文化遺産との象徴的な結びつきをもつ「場所」である。さらに、象徴的な意義をもつ「発見された場所」としてのトルコの境界と、文化遺産の「保護」と「破壊」を区別する境界を重ねて捉えるかどうか、それぞれの主張の違いにも表れている。

### 2. ガンダーラの仏教彫刻における娼婦と娼館——男性の顎に手で触れる女性と鏡を見る女性を中心に——

田辺 理

非仏教的な外観をした二つの浮彫が平山郁夫シルクロード美術館に所蔵されている。この二つの浮彫は、各々上中下三段に分かれ、各段に建物と世俗の人々(数人の女性・

一人の男性)を描写している。また、両浮彫の画面構成は酷似しており、且つ建物や人物像の表現様式が一致しているので、同一工房で製作されたに相違ない。

両浮彫で最も注目されるのは、建物の中に描写された「男性の顎に手で触れる女性」と「鏡を見る女性」である。この二点の女性像は、この両浮彫全体の図像を解釈する上で、特に重要なものであると考えられる。

まず、「男性の顎に手で触れる女性」から述べると、このような図像はギリシア美術(陶器画)などに見られる「顎に手で触れる仕草」に起源し、ヘレニズム・ローマ時代まで継承されている。その仕草は更に東方に伝播し、ガンダーラでは化粧皿や仏教彫刻などに見られる。そして、この仕草の意味は、既往のギリシア美術研究によれば、「嘆願」、「哀願」、「求愛」、「誘惑」、「愛撫」などである。当該作品の場合は、女性が男性に対して、「求愛」、「誘惑」、「愛撫」している性愛表現であると解釈できる。

次に、「鏡を見る女性」について述べると、この図像の特徴は、女性が柄鏡を持って、化粧をしている点である。彼女は化粧の出来映えを入念に点検している。このような女性の行為が有する象徴的意味については、古代インド及びガンダーラの仏教美術に表現された類似の図像と比較すると、それは化粧の後になされる性愛行為を想起させるものとして解釈できる。

上記の「男性の顎に手で触れる女性」は、堅気の女性ではなく、商売女と考えられる。特に古代インドではガニカーと呼ばれる高級娼婦が珍重されていたので、この女性像も高級娼婦である蓋然性が大きい。一方、「鏡を見る女性」は、男性の客に会う前に化粧の状態を確認している女性と見なせば、彼女も同じく高級娼婦と見なすのが妥当である。館の中の他の数人の女性像も同じように、娼館で働く女性たち(娼婦ないし侍女)と考えられる。以上の考察から、この二つの浮彫は娼婦と娼館を描写したものであると結論する。

### 3. ウスルシャナの都城址カライ・カフカハ I 遺跡から出土した壁画について

影山 悦子

タジキスタン北部、ホージェント市の南西に位置する中世初期の都城址カライ・カフカハ I 遺跡は、1965年から72年まで宮殿址で発掘がおこなわれ、室内を装飾していた壁画や木彫が多数出土した。かつてウスルシャナまたはウストルシャナと呼ばれた地域の領主が7世紀から9世紀ころまで拠点としていた都城であると推測されている。ウスルシャナは、サマルカンドを中心とするソグディアナの北東に隣接し、文化的にも近い関係にあった。

壁画が発掘された直後に、発見された壁画について報告された。ローマの始祖伝説を

表すロムルスとレムスを表す壁画、ライオンに乗る四臂の女神などは、よく知られているが、これらは宮殿で発見された壁画のごく一部であった。2009年になって、エルミタージュ博物館壁画修復室の V.M. ソコロフスキーによって、カライ・カフカハ I 遺跡から出土した壁画についての単行本が、大量の図版とともに出版され、その中には未発表の壁画の描き起こし図や写真が多数含まれている。

東京文化財研究所は、タジキスタン共和国科学アカデミー歴史・考古・民族研究所と共同で、2008年から、タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画の保存修復作業を実施している。カライ・カフカハ I 遺跡出土壁画の保存修復を優先的に進め、壁画断片の写真撮影、同研究所が保管している壁画の描き起こし図や模写のデジタル化も行っている。それらの資料の中には、ソコロフスキーの本に含まれていないものもある。

壁画のほとんどは、小さな断片となって床の上で発見されている。宮殿の建物が火災に遭い、壁画も焼けて剥がれ落ちたと考えられる。この火災は、イスラーム勢力の攻撃によるものと推定されている。大量の壁画が発見された第4室については、壁画断片が発見された場所などを手掛かりとして、四周の壁面のどの部分にどの壁画が描かれていたかを示す復元案も作成されており、これによって第4室に描かれた壁画の内容を解釈する試みははじめて可能になった。

本発表では、最初に、新たに公表された壁画の線画、復元案について紹介する。次に、宮殿第4室を飾っていた壁画の内容に関する先行研究を検討する。最後に、ベンジケント遺跡などソグディアナの遺跡から出土した壁画との比較を行い、ウスルシャナの壁画の特徴について考察する。

#### 4. プグッチ遺跡聞き取り調査（2008）に関する現地調査（2009）——パキスタン北部 地方ダレル渓谷と『法顕伝』陀歴仏教寺院—— 土谷 遥子

2009年度にダレルのマジェアニ渓谷で実施した現地調査の報告である。マジェアニ渓谷は2008年度実施のプグッチ遺跡聞き取り調査で始めて言及された未知の渓谷であった。

2008年度の聞き取り調査では、法顕伝の陀歴（ダレル）の仏教寺院の記述と比較するために、プグッチ村に残るプグッチ遺跡に関する伝説が収集され、第51回大会及び『オリエント』第53巻第1号で報告された。法顕の見聞と村民の認識が「大仏像のある世界的な仏教巡礼地であった」という点で概ね一致していることが判明した。

この聞き取り調査ではプグッチ遺跡の“防衛”及び“水源”に関する新情報も齎され、この二つの役割をマジェアニ渓谷が果たしていたという。防衛は、敵がダレルの上流域から侵入すると、男性はまず女性と子供をマジェアニ渓谷の洞窟に避難させ、貴重品を保管し、前線に向かったという。またプグッチ仏教寺院の用水の供給源はマジェアニ川

にあり、マジェアニ川水源から取入れた用水は土管でブグッチ寺院に供給されたと語られた。

マジェアニ渓谷は、1998年来の調査でも認知されず、今回の調査で始めてその存在が確認され、ブグッチ遺跡の南南東にある無名の山(3511m)から西方へ、ダレル川に向かって伸びていた。この渓谷の最奥の泉から流れ出るマジェアニ川は、二つの滝や桑やイチジクの緑が覆う川岸を流れていたがダレル川には合流せず、下流域手前で岩石の間に伏流して終わっていた。それより下流域の涸川床や大滝が、曾ては豊かな川であったことを物語っていた。渓谷自体もダレル川の畔のカボッシ村の手前で終わっており、ダレル川左岸の幹線道路からマジェアニ渓谷の存在を仄めかすものは一切みられなかった。

マジェアニ溪流の両岸に多く認められた洞窟は入口が判別しがたく、中は大人数を取容する広さがあり最適の避難所であった。源流近くの二つの滝の中間地点で、水道の取り入れ口を発見し、続く水道跡を辿ると、ブグッチ遺跡に到達した。ブグッチ遺跡東側に水槽跡も認められた。1998年以来、謎であったブグッチ仏教寺院の水源が、マジェアニ渓谷にあったことが確認された。本現地調査で得た、聞き取り調査の信憑性を検討するための有力資料も、さらに法顕の見聞を解読するための手掛かりとしたい。

## 5. 1890年代エジプトにおけるタリーカ批判とナショナリズム 高橋 圭

本発表では、近代エジプトにおけるタリーカ批判の特徴を解明する作業の一環として、アブドゥッラー・ナディームとムハンマド・ウマルの二人の人物の批判言説を分析し、特に1890年代におけるタリーカ批判の特徴の考察を試みた。

1890年代はそれまで許容されてきたタリーカの儀礼や教義に対する批判が本格化し始めた時期であったが、同時にこの時期は、1882年から続くイギリス占領という状況下で、ナショナリズムの台頭とその公的議論の場としてのジャーナリズムの発展を見た時期としても重要である。

ナディームとウマル二人の批判言説を相互に比較しながら分析したうえで、本発表ではその特徴を以下のようにまとめた。

まず両者の批判に共通する特徴として、タリーカがいわゆるイスラームの正統教義との関わりのみならず、むしろウンマとの関わりでより問題とされていた点を挙げることができる。なお、ここでの「ウンマ」とは、この時期にはオスマン帝国臣民とエジプト国民の両方の意味を含む概念として用いられていたが、いずれにしても、「ウンマ」とはエジプトの独立という政治課題の中で独立する主体として想定されるものであった。そして、ナディームとウマルは共にタリーカの活動が彼らのウンマに恥をもたらしている一すなわち他のウンマ(もっぱらヨーロッパ人を指す)の誤解や嘲笑の対象となって

いる一ことを最大の問題とみなしていた。

他方で、ナディームがタリーカにウンマの団結を促し民衆に宗教・倫理教育を施す潜在的な可能性を見出していたのに対して、ウマルはタリーカが民衆を党派に分裂させる要因となっているとしてその存在意義を否定しており、両者の見解には相違も見られる。しかしながら、二人の一見相反する評価の背後には、タリーカの存在意義をウンマの利益との関わりで見るとの共通の認識があり、また両者は共にタリーカ独自の神秘思想や宗教儀礼としての側面には全く価値を見出していなかった。

以上の特徴を明らかにしたうえで、本発表では次のような結論を提示した。すなわち、彼らの批判は、タリーカが植民地支配からの独立のためのウンマの団結と改革に利するものでなければならないという主張や、またそのためにはタリーカが脱神秘化してより一般的な意味での宗教教育や倫理を体現しなければならないという主張に支えられたものであり、その点でそれは19世紀末のエジプトの政治社会状況を強く反映したものであったとみなすことができる。

## 6. ハサン・バンナーの論考集に見られる歴史叙述の特徴——初期ムスリム同胞団における思想についての予備的考察——

福永 浩一

1928年にエジプトでハサン・バンナー（1906-1949）により創設されたムスリム同胞団は従来、20世紀のイスラーム世界における大規模なイスラーム復興運動の組織として紹介され、創設者バンナーの思想は旧来の伝統的知識人とは異なる近代的イスラームの実践運動の側面から取り上げられてきた。

本発表の目的は、ハサン・バンナーの著作の中に見られるイスラーム史に関する歴史認識を抽出し、その性質に分析を加えることであった。発表者は本発表において、彼の執筆した論考集 (*Majmū'a Rasā'il al-Imām al-Shahīd Hasan al-Bannā*) に依拠し、同論考集内のいくつかの論考より、主に歴史的事象に関わる具体的叙述の訳出を試みた。これまでバンナーの思想における歴史叙述をどう評価できるかという点について、管見の限りそれに焦点をあてた専論は存在しない。そこで彼の歴史観を検証することは、同胞団の思想が運動に与えた影響について検証する好適の材料となると考えられた。

本発表での論考の分析により明らかになった彼の歴史観の特徴としては、第一に、スンナ派ムスリム知識人の伝統であり近代サラフィー主義思想の特徴でもある、預言者と同世代の「教友」の時代と彼らの言行を、イスラームの「規範」とみなす点で共通する部分が見られるということであった。そしてイスラームの初期を単なる過去の考証の対象ではなく現代ムスリムが従うべき理想と考えて強調し、現実の同胞団の運動の指針とする際に頻繁に引用していたことが特徴として指摘できる。

第二に彼はイスラーム世界と西洋世界をわけ、相互に勢力が対立・競合しあう関係にあったと考える。ムスリムは初期において強固な団結と献身性により西洋を圧倒したが、その後初期の精神を忘れ分裂、墮落したため、近代以降力を増した西洋に屈服する結果となったとし、歴史を動かす要因として倫理的側面を重視していた。本発表では以上の点をまとめ、史料の引用や抄訳箇所に対する具体的説明により意義付けを行なった。

本発表で取り上げたバンナーの歴史観については、その精密な分析のためにより多くの史料の読解が不可欠であり、本発表は予備的考察となった。今後同様のテーマで研究を進めるにはバンナー自身の他の著作に加え、主要なイスラーム主義思想家の執筆した史料の読解を進め、考察を加えることで新たな展望を開く必要性を感じた。

## 7. 地方出身者の社会的ネットワーク構築のあり方——エジプト都市部の同郷者団体を中心にして—— 岡戸 真幸

本発表は、エジプト、アレクサンドリアで、地方出身者が都市で生活する中で作る人間関係において、自らの出自を基に、同郷者とのつきあいを続ける現象に注目し、上エジプトのソハーグ県出身のある親族を、家系図を元に詳述することで、そのつきあいが持つ意味について、分析と考察を行った。

本発表の意義は、従来同国で男性が仕事を中心に社会的ネットワークを作ると言われてきたが、それ以外に、地方出身者が自身の出自を介して生活のためのネットワークを構築していくあり方と同郷者団体がその中で果たす役割について、事例を通して検証していく点にあった。

事例は、ある個人が関わる3つの異なる関係として、一番身近な人間関係である婚姻関係、自身の日常的なつきあいが反映される場である追悼儀礼、都市での同郷者との出会いの機会を提供する同郷者団体を取り上げた。これらから、彼らが、都市において、親族内婚をすることで、親族同士の関係を維持し、お互いの人生儀礼に関わり、故人の追悼儀礼において、出身地の名を掲げ、多くの同郷者が参列することで、彼らとの関係を新たにし、同郷者団体の設立で、都市にいる同郷者との親睦と葬儀の費用面での助け合いにより関係を維持することをを行う様子を報告した。

しかし、こうした関係のあり方は、世代や個人によって異なる傾向がある。追悼儀礼において、自身の故地や商売上のつきあいのある同郷者へ弔問に出かける移住一世に対し、より広く故地だけでなく近隣村などのソハーグ県出身者からソハーグで催される親族へも弔問に出かける都市生まれの人という違いが存在した。また、同郷者団体は、後者が積極的に働きかけた結果として設立された。つまり、後者は、都市で生まれながらも、ソハーグ出身者であることをいかし、より広い人たちと関係を結ぼうとしていると

言える。

結論では、都市においてより広い関係を作ることの意義を考察した。多くの同郷者を知ることは、都市で起こる様々な問題に対処する方法の獲得につながり、同郷の政治家への陳情手段を生み、日常生活の範囲を超えたつきあいの輪を作ることが彼らの生活に新たな可能性を作る。そして、同郷者団体は、こうした中で、「地方出身者」という属性の組織化を行い、人々にお互いを知り合う機会を提供し、その交流の象徴になっているのである。

## 8. ミムナーに見る現代イスラエル社会の共生と共食

蓼沼理絵子

ミムナーとは、1900年にも及ぶディアスポラの間により形成された、ペサハ明けを祝う北アフリカ系ユダヤ人の伝統的祭りであるが、エレッツ・イスラエルへの帰還後、1960年代から始まるアシュケナジームの支配社会に対するセファルディームの政治社会運動に伴い、セファルディック・アイデンティティの復興の象徴とも見なされるようになった。したがってミムナーは、北アフリカ地域及びエレッツ・イスラエルにおける民俗学・文化人類学的アプローチと、エレッツ・イスラエルにおける再構築を扱う社会政治学的アプローチによって研究されてきた。今回は「共食」をテーマとし、ミムナーの食卓から、その形成と変容を追った。

ミムナーは、三大巡礼祭の一つで春の農耕の開始を告げる農耕祭としてのペサハと密接な繋がりを持つ。日本民俗学的概念からすると、ペサハにおける聖と俗に対し、ミムナーの「ハレ」と「ケ」は非日常と日常である。またペサハにおけるハメツ（酵母）の禁忌は「穢れ＝ケガレ」を意味するが、ミムナーにおいては「ケガレ＝気・枯れ（活力の喪失）」となる。したがってミムナーの祭りとはその生活の活力回復ための祭りであり、同時に、聖（ハレ）から俗（ケ）への橋渡しとなる境界領域の祭りと言える。その象徴がペサハの「ケガレ＝穢れ」であるハメツを入れてペサハ明けに最初に焼くモフレタという、「ハレ＝非日常」の食卓の薄いパンである。

しかし、北アフリカ地域において私的な家庭の行事であったミムナーは、エレッツ・イスラエルではセファルディームの社会運動に巻き込まれ公共化・政治化し、ペサハ前にハメツを預かり、その禁忌を遵守する手助けをしていたムスリムとの絆の回復という、かつて北アフリカ地域で持っていたトランスナショナルな性格を失っていく。エレッツ・イスラエルでの変容の過程において、ムスリムはミムナーの共食の食卓から「取り除かれる者＝ケガレ」となっていったのである。今やミムナーはセファルディック・アイデンティティを超え、ユダヤ・イスラエル人の「ナショナルな」祭りへと変容し、記号化・サブカル化が急速に進んでいるが、モフレタはその記号化の象徴でもある。このミム

ナーの食卓を誰と共にするのかに、イスラエルのナショナル・アイデンティティの一端が垣間見られるだろう

なお、ミムナーの食卓やイベントの具体的なイメージを掴むために、今回は写真を多用しながら説明を行った。

## 9. 6-7世紀エジプトにおける教会とその社会的影響力——ナイル中流域、単性論信仰をめぐる—— 貝原 哲生

451年のカルケドン公会議を境にカルケドン派と単性論派との教義上の対立は次第に深刻の度を増し、6世紀後半には後者が、アレクサンドリアに総主教座を頂き、農村部の修道院を拠点とする独自の教会組織を構築するに至った。それが可能だった背景として従来研究は、単性論派に対するエジプト住民大多数の圧倒的支持、彼らが組織の基盤とした農村部の経済的活況、カルケドン派の賛同者が一部大都市の富裕層や帝国官吏に限られていたこと、そして都市と農村部との結びつきが希薄だったことを挙げ、都市のカルケドン派と農村部の単性論派とを対置した。さらに、後者の主教座がエジプト全土でカルケドン派の主教座と並存していた可能性も指摘されている。本発表の目的は、アレクサンドリアに端を発するこの宗教的対立が、各地の教会・修道院でどのように受容され、またそれらを窓口として現地社会にいかなる影響をもたらしたのかを分析することであり、その対象としてナイル中流域のファイユームとアフロディトを設定した。

ファイユームでは両派の主教座の並立はみとめられず、都市にただひとつ存在していた。またこの地方最大の修道院ネクロニオンとその影響下にあるカラモン修道院は熱心な単性論派であった。そして主教座と都市、修道院および農村部は土地経営や商取引、信仰をつうじて幾重にも結合していた。そのような社会において、自身の主教区内に様々な宗教的立場の人間を抱える主教は教義論争に対して曖昧な態度をとることで、他方、農村住民もカルケドン派の総主教に対して、少なくとも表面上は、敬意を払うことで、無用の軋轢を回避しようと努めていた。

アフロディトは自己徴税権を有する大規模な村で、その住民は単性論派に共感を抱いていた。だが、アンタエオポリス市のパガルコスがこの特権を侵害したとき、彼らが頼りとした同市の主教やテーバイのドゥクス、ユスティニアヌス帝は、立場上、反単性論派であった。つまり、アフロディトの住民は宗教的感情よりも世俗社会における自らの権益の確保を優先し、宗派的な相違を誤魔化しながら、既存の社会的枠組を維持せんとしたのである。それは、同村の代表者ディオスコロスが彼の手による請願書や頌詩のなかで両派の支持者に受け入れ可能な表現を用いて相手を称えていることから裏づけられる。

それゆえ、宗教的対立がこれらの地方社会に及ぼした影響は限定的だったといえる。

## 10. ハム仮説とエチオピア——19世紀中葉イギリスの人種論におけるエチオピア——

石川 博樹

19世紀西欧人たちは身体的特徴の測定という「科学的研究」に基づいて世界中の人種を分類していった。このような研究の中で、アフリカの中部・南部に住む人びとは劣った人種という烙印をおされた。それに対して彼らとアフリカ大陸北部のセム系諸民族の間に居住する人々は、白人に近い「ハム系民族」と分類された。さらにこのような人種分類論に基づいて、アフリカの中部・南部の王国は全て北から到来したハム系民族が創始したとする「ハム仮説」が提唱された。

ハム仮説の提唱者として一般に知られているのはイギリス人探検家スピークである。スピークによれば、大湖地方の諸王国を建国したのはエチオピアの「ガッラ」(オロモ)と起源を同じくする民族であった。このスピークの仮説については、当時ヨーロッパで論じられていた人種論に基づいたのものでありとしばしば指摘されてきた。しかしこのような解説は次の2つの問題を内包している。まずエチオピアにおいて長らくオロモを蛮族視するセム系民族中心歴史観が流布していたにもかかわらず、スピークの仮説においてオロモが文明の担い手とされた矛盾については未だ検討されていない。次に当時のヨーロッパ、特にイギリスにおいて展開された人種をめぐる議論とスピークの主張の関係も未解明のままである。本発表では、スピークの著作をはじめとする当時のアフリカ探検記録、および人種論に関わる著作を分析することにより、これらの問題の解明を試みた。検討の結果得られた結論は以下のとおりである。

1. 19世紀中葉の時点でエチオピアではセム系民族中心史観は流布していなかったうえ、そもそもスピークはオロモをセム系民族に起源を持つ民族であると認識していた。そしてスピークはこの民族が移動を繰り返し、エチオピアから遠く離れた地域にも居住していることを見聞していた。したがってオロモが大湖地方に文明をもたらしたと主張することはスピークにとって突飛なことではなかった。
2. スピークの人種観は『旧約聖書』に依拠しており、人種研究の最新動向を把握していたわけではないと思われる。しかし1850年代から1860年代にかけてのイギリスでは、アフリカ人をヨーロッパ人やセム系諸民族とは別種の下等な人類とみなす、ハム仮説に通じる人種差別的色彩の濃い人種論が興隆しており、スピークがその影響を受けていた可能性は高い。

## 11. イスラエルにおける国立公園／自然保護区の成り立ち——法整備と国土開発の視点から見た文化資源——

岡田 真弓

本発表ではイスラエルが行ってきた文化資源活用のプロセスを明らかにするため、国立公園・自然保護区制度に焦点を当て、それらの文化資源化に関わる法律と内容の変遷を検討した。

イスラエルの国立公園と自然保護区は、世界でも有数の多様性を持つ動植物相や景観、歴史遺産を保護すると同時に、国民や観光客にレクリエーションの場を提供してきた。しかし、これまで国立公園と自然保護区が果たしてきた社会的役割を論じたものは僅少であり、また制度としての形成過程が顧みられることはなかった。そこで本発表では、国立公園と自然保護区の管理運営に係る法律「国立公園・自然保護区・国立史跡・記念史跡法」と国土開発と文化資源保護に係る法律や基本方針の歴史背景やそれらの条文を紐解き、建国後60年の間に形成された国立公園と自然保護区の変遷を明らかにした。

まず過去三回発行された国立公園・自然保護区・国立史跡・記念史跡法の条文を比較検討した結果、以下の三点を指摘した。一点目に、当初遺跡展示が主流の国立公園と自然環境を保護する為の非公開区域が多かった自然保護区が、90年代を境にその性質が変わったことである。国立公園は市民に対して自然と触れ合うレクリエーションの場を提供する役割を、自然保護区もレクリエーション施設を施し一般公開する役割を担うようになった。二点目が、これまでの展示の中心は建国以前の物質文化が展示の中心であったが、92年に国立史跡や記念史跡という概念が導入されたことにより、入植者第一世代の歴史にも「文化資源」としての価値づけが行われ始めたことが分かった。三点目が、当初中央政府中心で行われてきた文化資源管理が、地方自治体に権限や民間の代表が決定プロセスに参加できるようになったことである。

次に国土開発に関する法律や基本計画から国立公園・自然保護区の成り立ちを見た結果、三つの特徴を示した。一つ目が国土全体に広がっている国立公園と自然保護区が90年代以降郊外の空地の活用手段となったこと、二つ目が90年代以降開発時の史跡保護に関してより細かい地域単位での管理が求められるようになったこと、三点目にこれまで保護規定のなかった近代の歴史的建造物が保護対象となったことである。以上二つの検討から、イスラエルにおける文化資源利用は1990年代を境に、国立公園と自然保護区の社会的役割、管理体制、造設方針、保護対象が変化したことが明らかとなった。

## ポスターセッション

### 1. ユーフラテス河中流域の先史遺跡——第四次踏査報告——

西秋 良宏・門脇 誠二・下釜 和也

2010年2～3月にシリア北部、ユーフラテス河中流域でおこなった遺跡踏査について述べる。2008年3～4月、2009年2～3月、同5月に続く第四次調査である。対象地は、前3千年紀青銅器時代遺跡であるガーネム・アル＝アリの周囲、半径10km圏である。踏査の目的は、当地に青銅器時代集落が営まれるにいたった歴史的経緯、青銅器時代の乾燥地開発の実態、そして、該期の農耕民・遊牧民間の社会関係をさぐることに、三点である。第三次までの成果については、既に本会で報告した。

今回の調査は上記三つ目の課題、前3千年紀における農耕民・遊牧民間の社会関係の解明に主眼をおいた。調査地はユーフラテス河川低地と乾燥ステップ台地との接点にある。低地にはガーネム・アル＝アリなどテル型集落が複数位置し、台地には同じ時代の墓地群がテルとペアをなすように分布している。また、墓地群はシャフト墓を主とするものの、遊牧民に固有とされるケルン墓のみで構成される墓群も見つかった。これら集落住人と墓の被葬者にかかわる社会関係については大きく三つの解釈が考えられる。

第1案：低地テルと台地墓群は農耕民、ケルン墓群は遊牧民の所産

第2案：低地テルは農耕民、ケルン墓群を含む台地墓群は遊牧民の所産。低地テルの墓は未発見

第3案：低地テル、ケルン墓群を含む台地墓群は全て同一の半農半遊牧民の所産

当初筆者らは第1案に傾いていたが、現在では第3案を採用している。一方、墓群が集落から比較的遠いこと(1-2km)、集落サイズに比べて墓の数が膨大に過ぎるようにみえることなどから、第2案を主張する研究者もおり定まっていないのである。

今回の成果の一つは、一部にケルン墓群が集中するシャフト墓域という新たな墓群形態がみつかったことである。すなわち、ケルン墓群と他の墓群の被葬者集団をことさら区別する必要がないことが示唆される。このことは第2、第3案どちらにも与する所見であるからなお結論をもちたものではない。しかしながら、前2千年紀には農耕民(シャフト墓群)と遊牧民(ケルン墓群)が分化していたらしいことに鑑みると、その直前における、このような混淆した様相は当地社会形成史を考察する上ではなほ重要と考えられる。

### 2. テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡(前期青銅器時代)直近墓地の発掘調査(2009年)

久米 正吾・沼本 宏俊

「セム系部族社会の形成」プロジェクト(2005-2009年度文部科学省科学研究費・特

定領域研究。代表：大沼克彦・国士館大学教授）の一環として、2008年度から2009年度にかけてシリア北部、ユーフラテス河中流域に位置するテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査を実施した。2008年度までは、主として盗掘墓で構成される墓の分布調査を実施し、型式学的分析を行うことによって、墳墓群形成の时期的変遷、出自を軸とする被葬者集団の構造、新たな別集団流入の可能性、被葬者間の階層の変異、等の仮説を提示した。一方で、盗掘墓という不完全な情報に基づいた仮説であるために、保存状態の良好な墓の発見、調査による実証的な検証作業が課題として浮かび上がってきた。

2009年の現地調査ではこの課題を解決するために、残存状況の良好な墓の発見を目指した。特にこれまで分布調査を実施していなかった現在のガーネム・アル＝アリ村内に位置するワディ・ダバ墓域において、盗掘墓の分布状況と未盗掘墓の存在が期待される地点の試掘調査を実施した。

分布調査により、ワディ・ダバ墓域においても大多数の墓が、盗掘ないし家屋・水路建設により破壊されていることが判明したが、地表面の保存状態が良好な地点が墓域内に1箇所発見されたため、その地点に試掘トレンチを設け墓の確認調査を行った。その結果、トレンチ内に少なくとも5基の地下式横穴墓の可能性のある竖坑が認められた。内1基の発掘調査を実施したところ、完形土器14点を含む推定約30点の副葬土器、ビーズ等装飾品、青銅製品、人骨標本、動物骨標本等を含む極めて保存状態の良好な墓であることがわかった。出土品の詳細な分析は今後速やかに進めていく予定であるが、これまで、1) 副葬土器の時期鑑定から、この地下式横穴墓の造営年代が紀元前2450-2300年頃であること、2) 副葬土器や出土人骨は原位置を留めていなかったものの、複数回の追葬が実施されたと推測されること、等の所見が得られている。

被葬者集団の実像解明に向け、出土人骨の古人類学的分析など複数の手法に基づいた分析を今後実施する予定である。そのためにも、残存状況の良好な墓が多数存在していると目されるこの調査地点の発掘調査を継続することにより、より多くの基礎的データを収集する必要がある。

### 3. テーベ西岸岩窟墓第47号 (TT.47) の調査

近藤 二郎・菊地 敬夫・柏木 裕之・河合 望・西坂 朗子・高橋 寿光  
ルクソール西岸、アル＝コーカ地区に位置する岩窟墓第47号墓は、アメンヘテプ3世時代の王妃ティイの家令を務めた「ウセルハト」という人物の墓で、1903年のハワード・カーターの報告や、この墓に由来する王妃ティイのレリーフが、ベルギーのブリュッセル王立博物館に所蔵されるなど、エジプト学の初期からその存在が広く知られていた

ものの、カーターの報告から100年以上が経過した現在では正確な位置すら不明となっており、再発見および再調査を必要とする墓であった。2007年度より、科学研究費（基盤研究(B)）の補助（研究課題名：『古代エジプト新王国第18王朝時代後期の岩窟墓の調査研究』、研究代表者：近藤二郎）を受け第47号墓の発掘調査を開始した。2008年度の第2次調査では、入口上部に刻まれた神々に礼拝するウセルハトのレリーフを発見し、カーターの報告以来、約100年ぶりに第47号墓の再発見に成功した。第2次調査の結果を受けて、2009年12月から2010年1月まで行われた第3次調査では、第47号墓の入口部分を更に掘り下げて、入口の全容を明らかにすることを目的とした。調査の結果、第47号墓の入口と入口両脇に脇柱が発見された。入口の幅は約1.2m、脇柱は高さ約2.8mであり、幅は約74cmである。脇柱には、垂直方向に5行の碑文が刻まれており、下部には被葬者であるウセルハトが座った姿で描かれている。第47号墓の入口上部や脇柱のレリーフは、石灰岩の岩盤に直接装飾されており、アメンヘテプ3世の治世後半の大型墓に特徴的なものである。

第47号墓入口の上部および脇柱の碑文については、約100年前にこの墓を調査したカーターも報告しておらず、これまでに知られていない未発表の資料であり、非常に重要な再発見となった。脇柱には、「王が墓地の長ハトホル女神に与える供物、彼女が北からの甘い風を運んでくれますように、彼女があなたのパーを取り去ることなく墓の中で生きる力を与えますように、王宮の印綬持ちの長、王のハーレムの長、ウセルハト、声正しきもののカーに対して」などの供養文が刻まれている。碑文からウセルハトがこれまでに知られていた「王のハーレムの長」という称号のみでなく、王宮の財務を管理する「王宮の印綬持ちの長」という称号を持っていたことが新たに判明した。

4. エジプト、メンフィス・ネクロポリスの文化財保存面から見た遺跡整備計画の学際的研究——2007～2009年度中間報告—— 吉村 作治・近藤 二郎・河合 望

エジプト・アラブ共和国、メンフィス・ネクロポリスは1970年代に世界遺産に登録されているエジプト有数の遺跡群である。近年、この遺跡群でも人口増加による環境汚染、地下水の上昇、観光客の増加、開発による遺跡破壊など様々な遺跡劣化の問題が表面化しつつあるが、全体的な遺跡整備計画に関しては議論が遅れていた。そこで、科学研究費補助金基盤研究(S)（研究代表者：吉村作治）の助成を受け、メンフィス・ネクロポリスの遺跡整備計画策定のための学際的研究を開始した。本発表では、2007年度から2009年度までの成果の概要を報告した。

本研究では、イコモスが設定した国際的な遺跡整備のガイダンスである「ブラ憲章」の行程を参照し、「遺跡の重要性の理解のための調査」、「将来的に影響を及ぼす要素の

調査」,「方針の策定」という主に3つの行程を経て、メンフィス・ネクロポリスの遺跡整備計画の策定を目指す。これまでの研究では、計画策定までの行程の中で「遺跡の重要性の理解のための調査」,「将来的に影響を及ぼす要素の調査」を実施してきた。

「遺跡の重要性の理解のための調査」では、考古学的発掘調査によって、当該地域の重要性の再確認、墓域分布に新たな資料を追加した。また、遺跡の保護・整備の際の基礎資料として、衛星画像と現地検証、地下物理探査によって地下埋蔵文化財を把握することができた。さらに、衛星画像をもとに、実地での三次元測量を加え、三次元の遺跡地図の作成を行った。

「将来に影響を及ぼす要素の調査」については、まず、遺跡の地質の状況を把握し、地盤が遺跡に与える影響とその対策、岩石の劣化原因と対応策などについて調査を行った。観光による遺跡への影響については、エコツーリズムの観点から現地調査を行った。遺跡の保存状態に関しては、遺跡群の劣化の度合い、遺跡整備の現状とその妥当性などについて調査を行った。また、遺跡・遺物の保存管理については、環境計測を行い、環境にあった適切な保存修復方法を確立するとともに、特に将来的な管理に力点を置き、調査研究を行った。

これまでの調査研究を踏まえ、現在は計画策定の最終工程「方針の策定」を行っている。策定にあたっては学際的な情報を地理情報と結び付けて管理する地理情報システム(GIS)を駆使している。また、今後は遺跡の管理者であるエジプト政府考古庁側との意見交換も行いながら、実現可能な整備計画の策定を目指す。

## 5. アメンヘテブ3世王墓の埋葬室に描かれた壁画の史料化に向けたデジタル画像化

菊地 敬夫・犬井 正男・佐藤真知子・吉村 作治

アメンヘテブ3世王墓はエジプト・アラブ共和国、ルクソール地区西岸の王家の谷・西谷に位置する。本研究の目的のひとつは、同王墓の埋葬室に描かれたアムドゥアト書の史料化である。アムドゥアト書は、埋葬室の南壁および北壁で横15.4m、縦3.1m、東壁および西壁では、横8.2m、縦3.1mほどの範囲に施されている。

王家の谷の王墓に描かれたアムドゥアト書は、E.ホルヌクがテキストの集成と編纂を進め、その理解に大きく貢献してきた。ただし、アムドゥアト書がテキストのみならず図像との組み合わせからなることを考慮すると、現状の史料が決して十分ではないことが容易に想像できる。そこで、この発表では、アメンヘテブ3世王墓の埋葬室の壁面をディスプレイ上に実寸大で表示できるようにデジタル画像化する試みについて発表した。

壁面の撮影には、自動で精度良くかつ効率的にカメラの方向を制御するため、上下方

向に±15度、左右方向に±360度の可動域を持つ、パノラマ写真自動撮影装置を製作した。また、壁面とカメラの位置関係を把握するために、各撮影位置でキャリブレーション用にレーザー光による19×19点を撮影し、さらにこれらのうちの9点の座標を測定する。

すべての撮影は、上述した自動撮影装置をプログラムによってコントロールして行い、壁面および測量用撮影をひとつのセットとして進め、三脚を移動するごとに繰り返し、アムドゥアト書の全体を撮影する。このような一連のシステムを開発しつつ、2009年2～3月の事前撮影調査を経て、2010年2～3月にアメンヘテプ3世王墓でアムドゥアト書の本格的な撮影調査を開始した。

各撮影位置における2,100万画素の撮影画像（小画像）99枚を、パノラマ作成ソフトPTGuiにより接合し、約3億8,000万画素の中画像を作成した。さらに、ズーム画像作成ソフトZoomifyを用いて、中画像から壁面のズーム画像を作成した。これによってディスプレイ上で実寸以上の画像を観察できることを確認した。今後、各壁面を1枚ずつの画像にし、研究者が利用しやすいようにデジタル画像史料を構築していく。

\* 本研究は文部科学省科学研究費補助金（平成20～22年度、課題番号20401026）の助成を受けている。また、本研究の一部は、文部科学省ハイテク・リサーチ・センター整備事業（平成17～21年度）による助成を得て行われた。

## 6. 日本・エジプト合同マスタバ・イドゥート調査ミッションの活動と特色（2003-2010）

吹田 浩

「日本・エジプト合同マスタバ・イドゥート調査ミッション」は、保存修復のミッションとして、エジプトのサッカラにあるイドゥートの名前を持つマスタバの地下埋葬室で漆喰の壁画を対象にして2003年より調査を開始し、今年（2010年）は第8次調査を8月に行った。これまで2003年度から2年間の予備調査を経て、2005年度より修復作業を行ってきた。イドゥートのマスタバは、古王国第5王朝終わりから第6王朝始まり（紀元前2360年ごろ）にさかのぼり、地下埋葬室に残る壁画は古代エジプト史の中で最古の時代に属するものである。

「日本・エジプト合同マスタバ・イドゥート調査ミッション」は、その名前の通り、日本とエジプトの両国が対等の関係で調査を行うことを前提としており、研究の背景を含めて相互理解を進めてきた。さらにポーランドの研究者も加わって、三か国の専門家との密接な協力関係によって研究成果を生み出している。

イドゥートの壁画はサッカラ・ギザ地域のもろい地層の上に漆喰を塗って描かれており、その場での補強では十分な処理が難しいため、はぎ取りによる修復を選択した。そ

の際、エジプトの経験をもとに、日本の表打ちの技術、ポーランドの裏打ちの技術を用いている。これまで埋葬室の西壁、北壁、東壁と作業を進めてきて、この地域におけるはぎ取りから裏打ちまでの一連の技術を完成させた。裏打ち後の壁画片は、本来の位置で壁面に仮止めを行っている。南壁については、漆喰の状態が繊細であり、従来のはぎ取りの方法では難しく、現在の検討項目になっている。

文化財の保全にさらに複合的なアプローチを行うため、2008年度に文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業のもとで関西大学において「文化財保存修復研究拠点」を設置して、「地盤班」「保存修復班」「文化・都市班」「技術開発班」に分かれて研究を行っている。

壁画の修復プロセスは、3つのフェーズに分けている。第1フェーズ（2005年～2009年）：西壁・北壁・東壁の壁画の剥ぎ取りと仮止めを行う。第2フェーズ（2010年～）：南壁の壁画の剥ぎ取りと仮止めを行う。第3フェーズ（2013年～）：壁画の最終的な取り付けを行い、母岩の強化および壁画片間の美観を検討する。

今年度、科学研究費の採択によって、イドゥートの地上部分のマスタバ部分も研究対象とした。これによって、マスタバを総体として研究することになった。

## 7. 古代エジプト神官文字の画像データベースについて

永井 正勝

発表者は2010年度より科学研究費補助金（課題番号22820007、研究代表者：永井正勝『古代エジプトの神官文字に対する「画像を利用した字形データベース」の構築』）の助成を受け、新エジプト語を対象とした神官文字画像データベースの構築作業を行っている。本発表はこの研究に至る学史的背景と本研究の概要を紹介したものである。

学史的な背景としてはエジプト学における文献研究において神官文字資料の原資料が分析の対象となっていないという現状を指摘することができる。つまり、エジプト学では現代の学者が神官文字資料を聖刻文字に書き改めた「聖刻文字転写」が分析用の「テキスト」として使用されており、神官文字資料を読み解きながら研究を進める学者が実に少ないといえる。その結果、神官文字の字形研究は極度に立ち遅れた分野となっており、100年以上も前に作成された Möller, G. (1909-12) *Hieratische Paläographie*, Band I-III, Leipzig. が現在でも基本書となっているほどである。しかしながら Möller のリストには文字素の認定や扱われている字形の数などの点で注意を要する部分がある。また、Möller のリストにはそれぞれの字形がいかなる単語で使用されているのかという情報が付加されていないため、文字と単語の関連を調べるためには逐一原資料に立ち返って情報を得なくてはならない。このような現状を受け、本研究では以下のような作業を実施している。

- ①画像データベースの構築に適した文字コードの設定：神官文字の文字コード（Möller 式）と聖刻文字の文字コード（Hieroglyphica 式）の対応関係を検討しながら、データベースの構築に適した文字コードを設定する。
- ②神官文字の画像データベースの作成：新エジプト語の文学作品である EA 10060 と EA 10682（共に大英博物館所蔵）をコーパスに選定し、神官文字の字形の 1 つ 1 つを画像化したデータベースを作成する。これによってコーパス内のすべての字形を検索・確認することができる。
- ③語釈データベースの作成：単語の情報を取めた語釈データベースを作成し、それを②の神官文字画像データベースにリンクさせる。これにより、単語と文字の両面から検索・確認をすることが可能となる。

## 8. 6-7世紀ナイル中流域における宗教的対立の展開——上エジプトとの比較から——

貝原 哲生

451年のカルケドン公会議を境にカルケドン派と単性論派との教義上の対立は次第に深刻の度を増し、6世紀後半には後者が、アレクサンドリアに総主教座を頂き、農村部の修道院を拠点とする独自の教会組織を構築するに至った。それが可能だった背景として従来研究は、単性論派に対するエジプト住民大多数の圧倒的支持、彼らが組織の基盤とした農村部の経済的活況、カルケドン派の賛同者が一部大都市の富裕層や帝国官吏に限られていたこと、そして都市と農村部との結びつきが希薄だったことを挙げ、都市のカルケドン派と農村部の単性論派とを対置した。さらに、後者の主教座がエジプト全土でカルケドン派の主教座と並存していた可能性も指摘されている。本発表の目的は、アレクサンドリアに端を発するこの宗教的対立が、地方の教会・修道院でどのように受容され、またそれらを窓口として現地社会にいかなる影響をもたらしたのかを分析することにある。

結論には以下が挙げられる。第一に、単性論派による教会分離の主因は同派の内紛であった。アレクサンドリアの単性論派は、シリアの単性論派がエジプトの単性論者もその管轄下に置かんと企図し、コンスタンティノーブルに居する単性論派の領袖テオディオスが彼らを後援したことへの対抗措置として、独自の総主教を立てたのである。それゆえ、必ずしもその対抗意識はエジプト全土の単性論者に共有されるものではなかった。

第二に、ナイル中流域のオクシュリンコスやファイユームでは、各地域にひとつずつしか存在しない主教座が都市や修道院、農村部と土地経営や商取引、信仰をつうじて幾重にも結合していた。そのような社会において、自身の主教区内に様々な宗教的立場の人間を抱える主教は教義論争に対して曖昧な態度をとることで、他方、農村住民もカル

ケドン派の総主教に対して、少なくとも表面上は、敬意を払うことで、社会的混乱を回避しようと努めた。

これに対して上エジプトのコプトスやヘルモンティスでは、二派の主教座が並立していたものの、都市と農村部との交流は活発でなく、そのうえ農村部の修道院に居を構える単性論派の主教は神学論争への関心に乏しく、都市への司牧権拡大にも消極的で、それゆえに両派のあいだに軋轢が生じることはなかった。

結果として、ナイル中流域、上エジプトのいずれにおいても、宗教的対立が地域社会に及ぼした影響は限定的なものとなった。

## 9. カジュバルダム水没危機遺跡からみたスーダン考古学の現状と課題

関廣 尚世

スーダン考古学はダム建設予定地での緊急調査が始まると言っても過言ではない。スーダンを代表するメロエ遺跡は、1772年にJ. ブルース (Bruce) がすでに再発見していたが、広範囲かつ多岐にわたる近代的考古学の始まりはアスワンダム建設に伴う調査であった。G. レイズナー (Reisner) が中心となり、アスワンから南へ約150 kmの水没予定地域で第1期調査を1908-10年、第2期調査を1929-34年に行った。

1960年代には、アスワンハイダム建設に伴ってヌビア遺跡群救済キャンペーンが行われ、1千件以上の遺跡が確認された。とくにスーダン側のヌビア遺跡群は、エジプト側よりも詳細な調査であったとされている。同キャンペーン以降、下ヌビアを中心とした考古学が隆盛したが、遺跡群の水没後はより南部への考古学的関心も高まっていった。

1990年代には、昨年完成を見たメロウィダムの建設予定地を NCAM、ローマ大学、グダニスク考古学博物館 (ポーランド) 等が調査した。この完成式典でバシール大統領は、第3急湍カジュバル地域でのダム建設実現を公言している。

カジュバル地域は、1990・1991・2000・2002年に A. オスマンと D.N. エドワーズらが「マハス・プロジェクト」として踏査を行い、トンボス (Tombos) からデルゴ (Delgo) にかけて、先史からイスラム期までの700件近い遺跡を確認した。地区によってはキリスト教期とイスラム期の遺跡が半数以上を占めるが、トンボス周辺ではエジプト王朝期の遺跡も確認されている。

スーダンの遺跡の調査や保存は、National Corporation for Antiquities and Museums、通称 NCAM やハルツーム大学が中心となって行っている。NCAM は2009年1月現在で、発掘調査部門 (23名)、博物館部門 (15名)、修復部門 (8名) の3部門で構成されている。もともと専門家の総数は、アフリカ最大の国土に散らばる文化財にとっても対応できるものではないのに加え、近年のとくにスーダン北部おける幹線道路、空港などの整備

により緊急調査が増加し、NCAM 職員は対応に追われている。そして、カジュアル地域でのダム建設は、この状況へさらに追い打ちをかけている。

NCAM 職員をはじめとする文化財関係者は、専門家の育成を視野に入れた日本との長期的な学術交流を切に望んでいる。

## 2) 学会奨励賞

第32回日本オリエント学会奨励賞は、門脇誠二氏（投稿時 日本学術振興会特別研究員）に決定しました。授与式は2010年11月6日の第52回大会の会場において行われました。

受賞論文は以下のとおりです。

門脇 誠二 「北ヨルダン、タバカト・アル＝ブーマ遺跡における後期新石器集落の構造——建築物と場の利用パターンに基づく世帯間関係の考察——」

『オリエント』第52巻第1号掲載

## 3) 作文コンクール

第4回「オリエント世界」作文コンクールでは、大野葵他7名の方の作文を入選作といたしました。又、学校賞として、鎌倉女学院高等学校、愛知県立豊田西高等学校、神奈川県立湘南高等学校、愛知教育大学附属岡崎中学校の4校に本学会が編集した『古代オリエント事典』を寄贈いたしました。

## 4) 新入会員

正会員（平成22年7月～12月）

田原 文子 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻、表象文化論コース、博士後期課程 専攻 古代ローマ世界におけるエジプト像（古代ローマ史、古代ローマ美術史）

亀谷 学 北海道大学大学院文学研究科 専門研究員、専攻 初期イスラーム時代史

石田 友梨 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程、専攻 イスラーム思想

犬井 正男 東京工芸大学工学部メディア画像学科・教授、専攻 画像工学

佐藤真知子 東京工芸大学工学部メディア画像学科・教授、専攻 画像情報処理

五十嵐小優粒 大阪大学大学院博士後期課程言語文化研究科、専攻 日本語とベルン

ャ語の対照研究

- 加藤磨珠枝 立教大学文学部准教授, 専攻 美術史  
北西 昭 自営業, 専攻 日本ユダヤ同祖論  
金井 年 大阪経済法科大学教養部講師, 専攻 人文地理学  
岡村 知明 東京文化財研究所 客員研究員, 専攻 都市史  
小茄子川歩 Ph. D. student, Department of Archaeology, Deccan College, Post-Graduate  
& Research Institute, Deemed University, 専攻 南アジア考古学 (イン  
ダス文明)  
内記 理 京都大学大学院文学研究科博士後期課程, 日本学術振興会特別研究員  
DC1, 専攻 ガンダーラの考古学  
北 博 東北学院大学教授, 専攻 旧約聖書学  
(再入会)  
渡部 良子 東京大学文学部非常勤講師, 専攻 前近代イラン社会文化史  
飯島 克彦 財団法人日本聖書協会翻訳部職員, 専攻 ビザンツ帝国史

5) 会員消息

古島 哲夫 (正会員) 逝去日不明 (平成22年8月24日ご家族より電話連絡有)  
本学会員として多年にわたりご協力を頂いてまいりました上記の方が逝去され  
ました。ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

退会

- 正 会 員 中村廣治郎, 中西由美子, 羽田 正, 武田久義  
維持会員 横山 滋,